ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

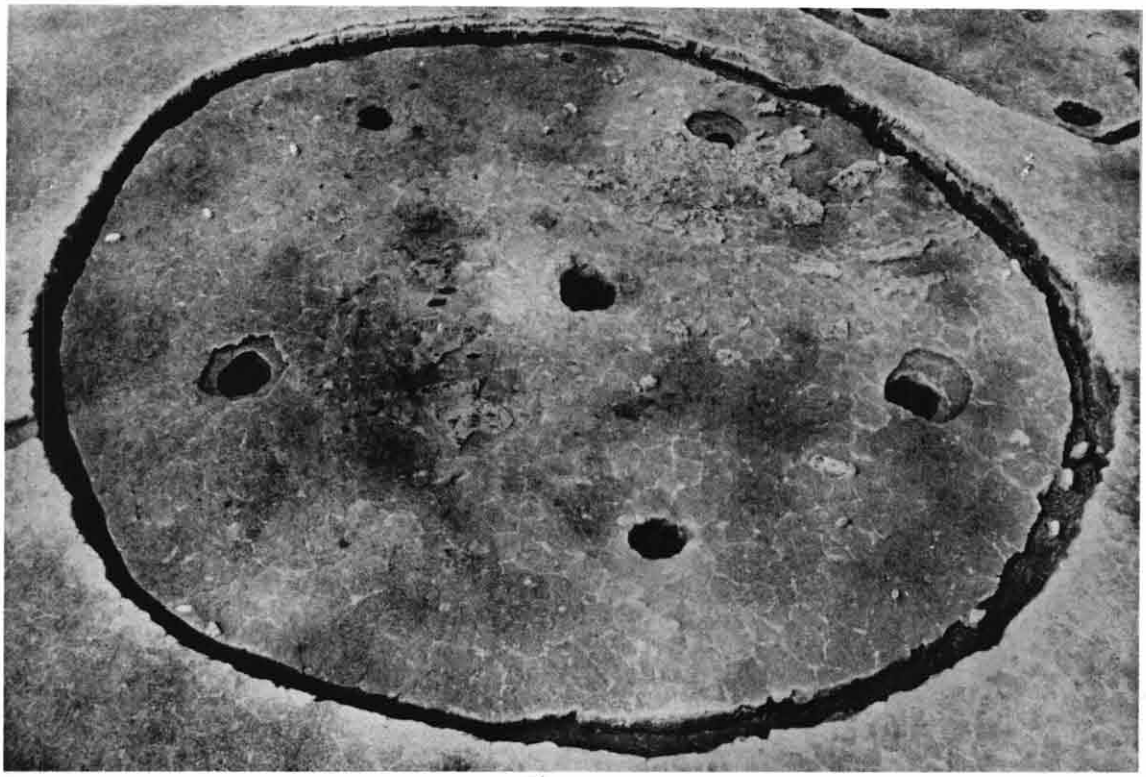
第 9 号

青野西遺跡の発掘調査について……小山　雅人…… 1
丹後木橋城跡試掘調査報告……飛田　範夫……11
洞楽寺北遺跡・洞楽寺遺跡発掘調査概要……岩松　　保……18
千代川遺跡第３次発掘調査概要……岡崎　研一……23
―昭和58年度発掘調査略報―……27
1. 田　辺　城　跡　　3. 蒲　生　遺　跡
2. 土　師　南　遺　跡
府下遺跡紹介　14. 綾中廃寺　　15. 上林城跡……33
長岡京跡調査だより……37
第２回「小さな展覧会」を終えて……41
センターの動向……43
受贈図書一覧……44

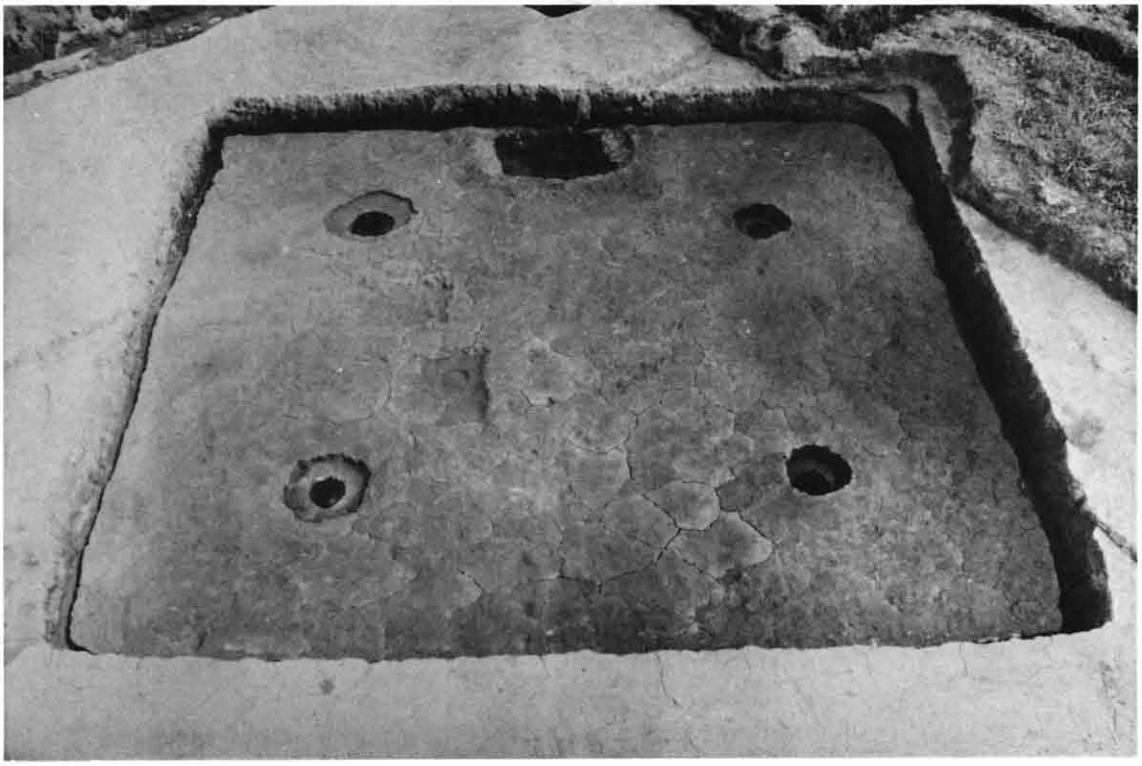
1983年9月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版1　青野西遺跡

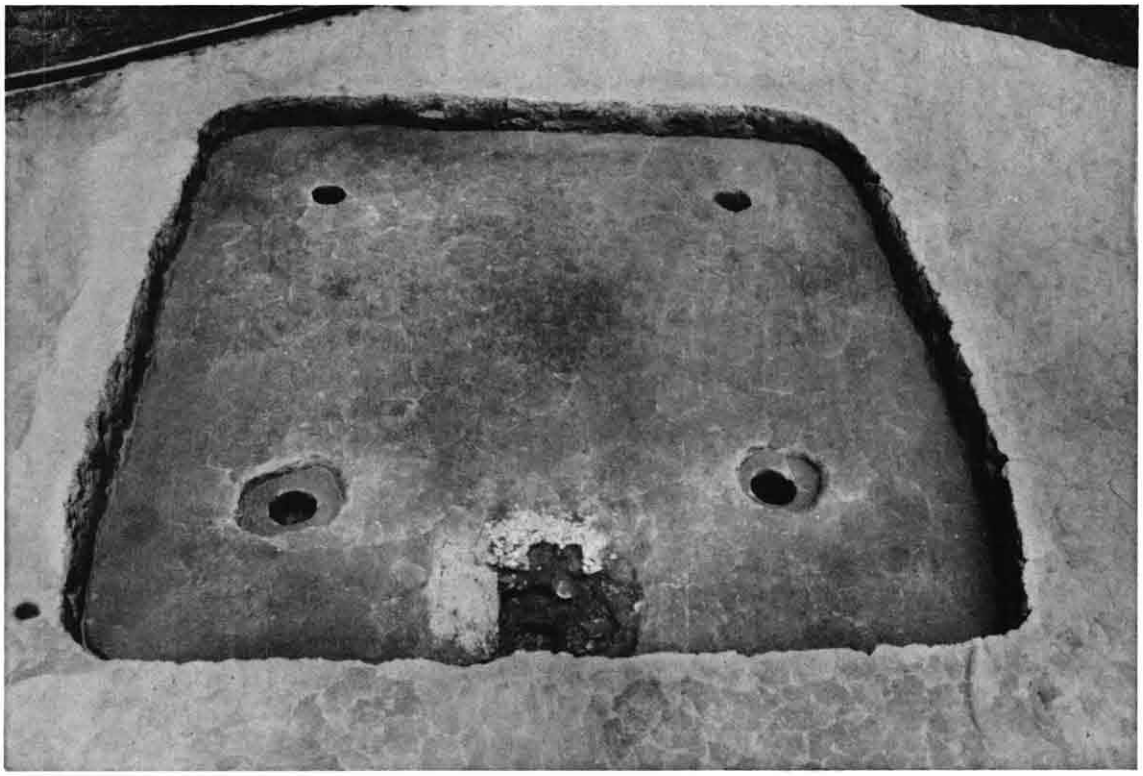


(1)　6号住居跡（南から）



(2)　7号住居跡（北西から）

図版 2　青野西遺跡



(1)　5号住居跡（南から）

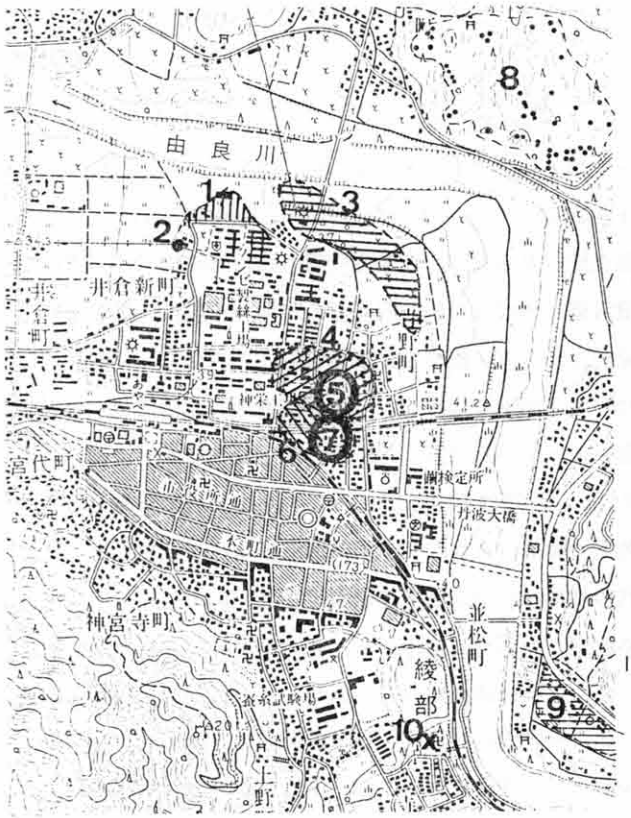
(2)　5号住居跡特殊ピット（南から）

青野西遺跡の発掘調査について　<図版1・2>

小　山　雅　人

1.　青野西遺跡の位置

丹波・若狭・近江の三国境に聳える三国岳に発する由良川は，全長 146 km で，流域面積 1,880 km² を潤す北近畿最大の河川である。丹波山地の深く狭い谷を抜け，綾部市域に入ってまもなく，福知山盆地の入口にあたる扇状地が開ける。これが旧綾部町（丹波国何鹿郡漢部郷）である。由良川は，この盆地の中で再三その河道を変えたことが知られている。旧綾部町東部を北流し久田山丘陵（**久田山古墳群**）に突き当たって東へとほぼ直角に曲がる現在の由良川以前，古くは西南方を円弧を描くように流れていたことが，地図や写真に見える数本の旧河道跡によって知られるのである。中でも，国道27号線と綾部市街地を結ぶ丹波大橋の辺りから北西に綾部用水路に沿って伸び，青野変電所（青野遺跡A地点）の南をかすめて現由良川に至る旧河道は最もよくその痕跡を残すもので，南西の住宅



1．調査地と青野西遺跡の推定範囲
2．青野大塚古墳
3．青野遺跡
4．青野南遺跡(集落)
5．青野南遺跡(官衙)
6．綾中遺跡(集落)
7．綾中廃寺跡
8．久田山古墳群
9．味方遺跡
10．寺町遺跡

第1図　青野西遺跡とその周辺遺跡（1/25,000）

地（**青野南遺跡**――7・8世紀の住居跡群と官衙跡，及び南接して**綾中遺跡**住居跡群と**綾中廃寺**）と北東の半月状に広がる自然堤防上の畑地（**青野遺跡**[注1]）に挟まれた帯状の水田地帯として，空から見ると鮮やかなコントラストを呈している。

青野遺跡（約 80,000 m²）は，縄文土器や瓦器等も出土するが，弥生時代中期・後期中頃から古墳時代前期・7～9世紀の3時期の遺構が多い府下有数の集落跡として夙に知られた遺跡である。

昨年度の青野遺跡第8次発掘調査は，上述の旧河道の断面調査等によって青野遺跡の西限を確認すると同時に，旧河道左岸に新たな集落遺跡を発見するという成果を挙げた[注2]。これを「**青野西遺跡**」と命名し，調査地 2,800 m² の大部分を全面発掘したのが今回の調査である。

この遺跡は，南から三角形に伸びた台地の先端部に位置しており，調査前は水田であった。調査地の南の畑地からも多くの土器片が採集され，遺跡は更に南へ続いていることが充分に考えられるが，範囲は明らかではない。なお，調査地の南西 300 m 足らずの所に**青野大塚**がある。測量の結果，直径約 20 m の円墳であると考えられる。

2. 調査結果の概要

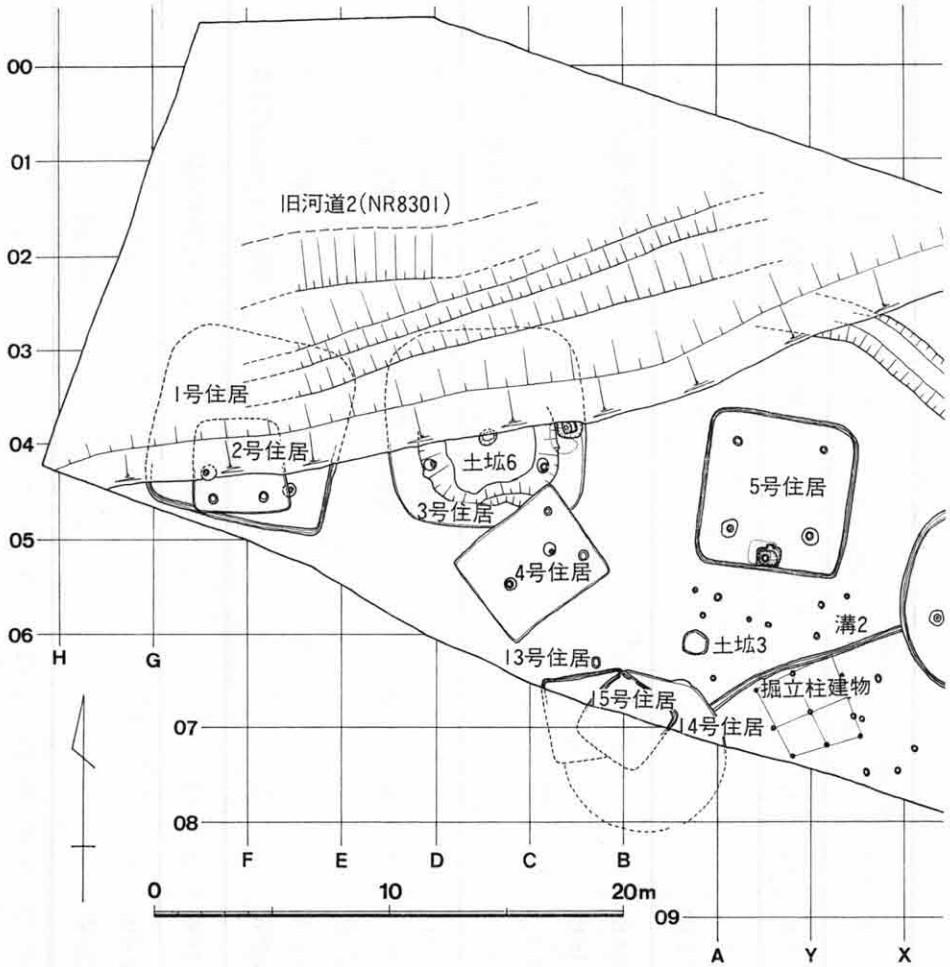
(1) 検出遺構（第2図）

15棟の竪穴式住居跡・ピット群・5基の土坑・3条の溝を検出した。これらは，水田耕土（厚さ 20 cm 前後）の直下のほぼレヴェル差のない平坦な地山を切り込んでおり，包含層と言えるものはない。調査地の東端部は，昨年度確認した自然流路 NR 8201 の西岸であるが，これは前述した**旧河道**に他ならない。旧河道の時期の下限は，最下層で出土した須恵器や土師器片が7世紀前半から9世紀までに限られるところから，平安時代初期に置けるのであるが，上限については明確ではない。一方，調査地の北西部は，調査前から低湿地を呈していたが，発掘によって自然流路（NR 8301）と判明した。規模や堆積土層が，前述の NR 8201 に類似し，時期は不明ながら，これも由良川の旧河道と考えられる。このように，遺跡の立地する微高台地は，2本の旧河道によって三角形を呈しているのであり，竪穴式住居の時代の地形は，現段階では復原できない。

15棟の**住居跡**の内，全形を確認したのは6棟であり，6棟は後代の遺構や旧河道によって一部または大半が消滅し，また3棟は調査範囲外へ広がっていた。各住居跡に関する数値等は，付表1を参照されたい。竪穴内には柱穴・周壁溝の他に，4棟で炉跡を検出している。炉をもたないことが確認された4棟については，例えば5号と14号住居の間の土坑のように焼土や炭・灰を伴うものがあり，戸外で煮炊きしていたことが考えられる。また，

時期	住居跡番号	平面形	規模(m) 東西	規模(m) 南北	方位	炉	特殊ピット	甕 Aa	甕 Ab	甕 B	甕 Ca	甕 Cb	石器	玉類	備考
Ⅰ	12号(SB8307)	隅丸方形	6.4	6.1	N35°E	○	×							ガラス小玉1	畿内的長頸壺
Ⅱ	14号(SB8309)	円形(?)						○							円形か多角形
	13号(SB8308)	方形(?)	3.5		N 8°E			○							
Ⅲ	15号(SB8310)	方形	3.4		N39°E			○		○					異様に深い竪穴
	11号(SB8306)	隅丸方形	6.0	6.0	N16°E			○							
	3号(SB8202)	隅丸方形	8.4		N 0°	○	◎	○		○					北半部消滅
	6号(SB8206)	円形5柱	8.7	8.6		○	○	○		○	○		石鏃1		近江産甕1，焼失
Ⅳ	1号(SB8301)	隅丸方形	7.8		N13°E					○			石斧1		北半部消滅
	5号(SB8204)	隅丸方形	6.5	6.5	N 6°E	×	◎		○	○		○	石斧3	碧玉管玉1	河内産庄内甕1
	10号(SB8305)	方形	4.9	4.5	N13°E					○	○	○			
	2号(SB8302)	方形	4.0		N 1°W					○					北半部消滅
	8号(SB8205)	方形	4.4	4.2	N27°W	○	○			○					特殊ピット南北に2基
Ⅴ	7号(SB8303)	方形	6.8	6.3	N44°W	×	◎		○				石鏃1		布留古式の坩
Ⅵ	9号(SB8304)	方形	5.3	5.0	N 8°W	×	×								布留式
	4号(SB8203)	(長)方形	5.3	4.4	N39°W	×	×								布留式

付表1 青野西遺跡竪穴式住居跡一覧

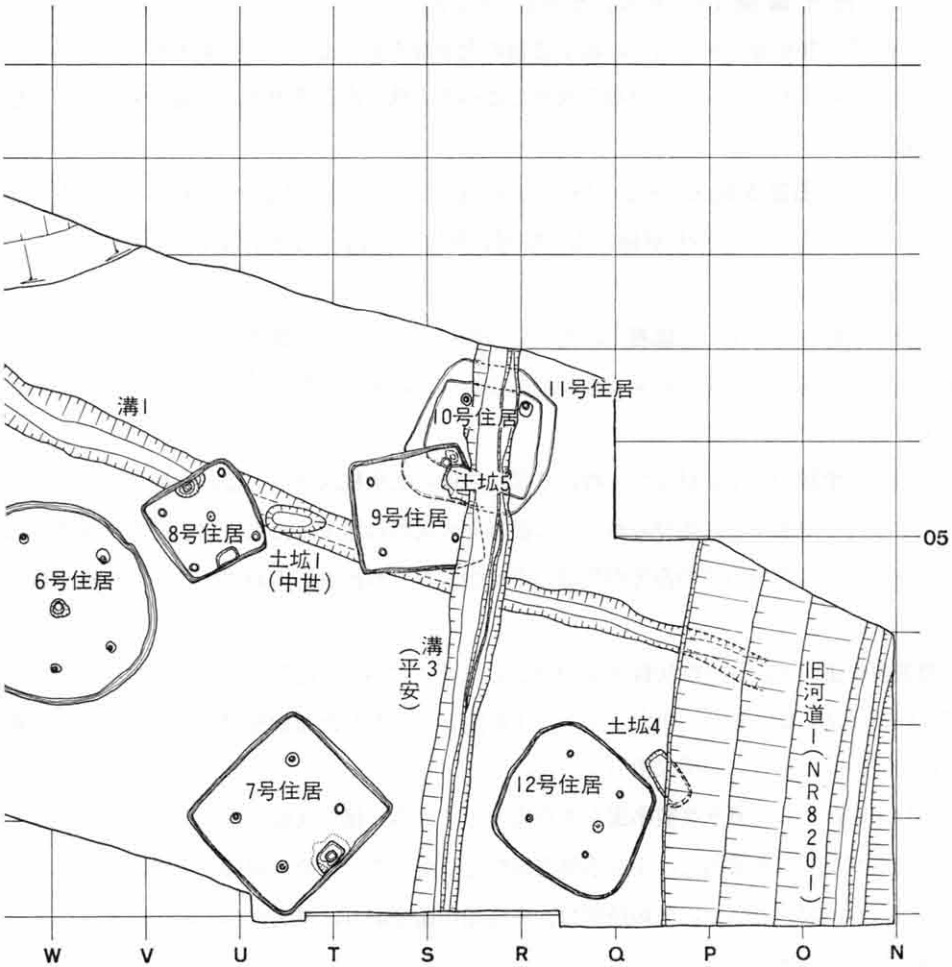


第2図　調　査

円形住居の中央，隅丸方形及び方形住居の1辺中央壁際に掘られたピットについては，**特殊ピット**と呼んでおくが，貯蔵穴・祭祀遺構・小児埋葬あるいは胎盤埋納の施設とする諸説がある。(注3) この種のピットは，青野遺跡でも検出されている。(注4) が，本遺跡の3号・5号・7号住居例は，掘形の周囲を砂利ないし小礫で叩き締めている。

6号住居跡は，5個の柱穴を五角形に配する円形住居である。火災にあったらしく，炭化した木材や焼土塊が床面各地に見られたが，東部に倒れ込んだ板材は長さ約 1.3 m を測り，住居の周堤内壁を支えていたものと考えられる。(注5) 15号住居跡では，その断面にこの種の板材の痕跡と思われる 3 cm 程度の厚さの砂質土を周壁に沿うように遺構面から周壁溝の底まで確認している。

6号住居跡の北東の柱穴の掘形には，1個の完形の甕が入っていた。甕は柱穴とは



区　全　図

重ならず，住居の建設時に何らかの意味を込めて，掘形内に柱と共に甕を埋納したらしい。(注6)

調査地の中央南寄りにピット群を検出した。少なくとも1棟の**掘立柱建物**(2間×2間)が復原できる。

3条の**溝**の内，調査地東部を南北に走る溝3は，少なくとも1度掘り直されているが，平安前期のものである。

東西溝については，遺物が殆どなく，水の流れた痕跡はあるが，短期間で埋まったらしい(弥生後期～古墳初頭のある時期)。

13号住居の北のピット中に手焙形土器が1個体埋納されていた。正置しており，元は完形であったと思われ，この正体不明の土器の出土状況の一例として報告しておく。

(2)　**出土遺物**（第3図には甕を主に示した）

この時期の集落跡の常として，出土遺物の大半は土器であった。弥生土器と古式土師器が大部分で，これらについては項を改めて述べる。他に南北溝出土の須恵器・土師器・黒色土器がある。

住居内から**石器**が数点出土している。5号住居跡に太型蛤刃石斧1・扁平片刃石斧2（内1点は未成品），1号住居跡に太型蛤刃石斧片（？）1，6号と7号住居跡に石鏃各1が見られた。

6号住居跡から出土した**砥石**は，鋭利な器物を砥いだ痕跡が顕著であり，間接的ながら本遺跡での鉄器の使用を示唆するものである。なお，鉄器に関しては，不詳の鉄片が1点出土しているのみである。

本遺跡は**土錘**の出土が目立つ。特に6号住居跡の北東柱穴付近には，10個の土錘が集中しており，柱か梁などに架けられていた漁網が火災時に落下したような状況を想像することもできよう。由良川での漁労が生活の中で少なからぬ比重を占めていたことを推察させる遺物である。

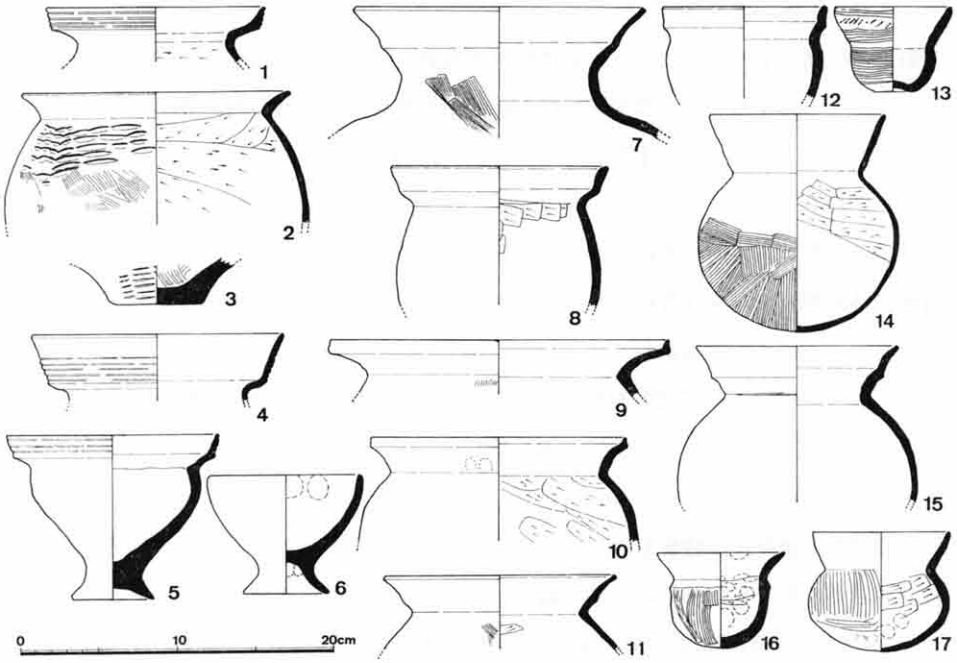
碧玉製管玉が1点5号住居跡埋土中層から出土している。硬質の碧玉で，表面は風化して淡緑色を呈しているが，幸か不幸か出土の際2片に割れた断面を見ると，中心部分は濃い緑色である。上下2か所欠損していた。

12号住居跡からは**ガラス製小玉**が1点出土している。保存状態は良く，美しいコバルトブルーのガラスは半透明で，中に小気泡がひとつ見える。この住居跡の土器は，殆ど長頸壺1点のみに限られるが，その時期は弥生後期中頃であり，確実に弥生時代のガラス小玉の例に加えることができる。(注7)

(3)　**出土土器の編年**

青野西遺跡の弥生土器ないし古式土師器は，コンテナにして40箱であるが，大半が竪穴式住居から出土している。中でも床面に接していた土器片は，実測可能なものが100点を越え，これらは編年作業上1等資料として扱えるものである。まだすべての資料の検討を終えている訳ではないが，床面資料に関しては一応目を通した段階で，弥生時代後期中頃から古墳時代前期までを6期に細分し，これを「青野西Ⅰ～Ⅵ期」とした。青野遺跡等でこれまで散発的に得られている一括資料と合わせることによって，問題の多い弥生終末から古墳時代への当地域における土器の変遷を追えるのではないかと考えている（付表1の住居跡一覧表と第3図の土器実測図参照）。

青野西Ⅰ期（12号住居）――長頸壺の形態，手法とも非常に畿内南部的で，第5様式を6小期に細分した第2ないし第3期(注8)に位置付けられよう。青野遺跡A地点第16号住居(注9)の



第3図 青 野 西 遺 跡 出 土 土 器

1・2（15号住居） 3～6（6号住居）以上青野西Ⅲ期， 7（1号住居）
8・9・11（5号住居）10（10号住居）以上青野西Ⅳ期，12・13（7号住居）
以上青野西Ⅴ期，14・17（9号住居）15・16（4号住居）以上青野西Ⅵ期

長頸壺は，これよりも一型式は新しいと思われる。後期中頃。

青野西 II 期（14号・13号住居）――Ⅰ期に引き続いて遺物が少なく，危険ではあるが，叩き目を残す甕B以前の，擬凹線を施す複合口縁の甕 Aa（1）の時期とする。後期後半。

青野西 III 期（15号・11号・3号・6号住居）――丹後系の甕 Aa（1）に畿内系の甕B（2）が加わり共存する時期である。畿内の庄内式古段階にかなりの部分が併行すると思われる。

青野西 IV 期（1号・5号・10号・2号・8号住居）――甕Bの存続期間の後半期にあたり，甕 Aa は擬凹線を失って甕 Ab（8）に変化する。青野遺跡35U06地点の一括資料は，(注10) 甕 Aa と Ab が相半ばし，Ⅲ期とⅣ期の中間に位置付けられよう。Ⅳ期には，にぶく曲るくの字状口縁の端部をつまみ上げた甕 Cb（9・10）が見られる。稀に1～2条の擬凹線を施した甕 Ca もある。丹後系擬凹線複合口縁甕の延長で理解できるかも知れないが，庄内甕に近い形態もあり，5号住居からは河内産の庄内（新）の甕（11）が出土しており，また同時期と見られる青野遺跡第6次 SB 8117 出土の一括資料(注11)中に畿内と言ってもよい形態と薄い器壁をもつ甕があり，庄内甕の地方的変種と考えておきたい。この甕と共に，小型器台・小型鉢・二重口縁壺（7）等の存在は，このⅣ期が畿内の庄内式後半期と併行

することを示している。

青野西 V 期（7号住居）――Ⅳ期に引き続き甕 Ab（12）があるが，叩き目を残す甕Bは，少なくとも7号住居には見られない。刷毛調整のくの字状口縁の甕が主体を成すと思われる。床面から出土した小型の坩（13）は，櫛描文や列点文で飾られた特異なものであるが，凹み底であるにも拘らず，布留古式に通ずる形態を持っていることから，このV期を畿内の布留式古段階に併行するものと理解しておきたい。

青野西 VI 期（9号・4号住居）――土器の印象が一変する時期で，全面的に布留式の時代に入る。山陰系の土器が目立つ。

なお，布留式の甕として特徴的な口縁端部内面を肥厚させた甕は，青野西遺跡にはなく，青野遺跡でも非常に少ない[注12]ことを付け加えておく。

3. 綾部の古墳時代の始まり――まとめにかえて

青野西遺跡の竪穴住居跡を，土器の編年に従って古いものから順に並べて見ると（付表1），その規模と平面形において，前半期は大型の隅丸方形であり，後半期は小型の方形に変化する様子が見てとれる（一般に古いとされる円形の存在は，1時期1棟のようであり，共同体の首長宅，あるいは集会場的な役割が考えられ，例外的に古い方形の15号は，他の2～3倍の深い竪穴であり，何か特殊な用途の建物かも知れない）。

この変化は青野西Ⅳ期に起っており，大型隅丸方形の1号・5号と小型方形の2号・8号・10号との差は，土器では分らないが，1号と2号の切り合い関係が示すような時期差と見ることができるなら，青野西Ⅳ期のある時点で住居が小型化したと理解できよう。畿内では庄内式期の住居が小型化すると言われているが，青野西ではそれが1時期半遅れているということになる。この変化の背景には，必ずや共同体社会の画期があったと考えられるのであるが，これと関連するのではないかと思われる今一つの歴史的現象がこの時期の綾部地域に起ったようである。

それは，古墳の発生に他ならない。綾部市最古の古墳は小西町の成山2号墳・3号墳[注13]であるが，その時期に関しては「4世紀後半」，すなわち丹後のカジヤ古墳や蛭子山（えびすやま）古墳と同時期[注14]に置く説が一般的である。しかし，3号墳西槨の土器[注15]は，上記青野遺跡6次 SB 8117の資料（青野西Ⅳ期――庄内新式併行）と同時期と考えられ，碧玉製腕輪類を副葬するカジヤ古墳を布留式中段階と見[注16]れば，これよりも2型式は古いのである。中央槨は無遺物だが，西槨よりもさほど遅れるものではなかろう。

成山2号墳は土器資料を欠くが，副葬品としてガラス小玉116個と飛禽文鏡1面がある。この型式の鏡は出土例が少なく，日本では現在成山例を含めて6面知られているに過ぎな

い。[注17] 成山と同じ平縁のものは岡山県宮山古墳 or 遺跡に副葬され，エビ酒津期（庄内新式に併行）とされ，[注18] また斜縁の鏡片が福岡県汐井掛遺跡で出土しているが，遅くとも九州の土師器 Ib 期（庄内新式併行）である。[注19] 時期が確かめられるのは以上の２例であるが，いずれも成山３号墳の土器と同時期であることは興味深く，成山例が完形鏡である点からも，鏡を副葬した２号墳は３号墳西槨の土器と相前後する時期に築造されたと考えられる。

このように，成山２号墳（直径 20ｍ・高さ 2.5ｍ の円墳（方墳か），割竹形木棺・朱）と３号墳（１辺約 20ｍ・高さ 1.5ｍ の方墳，組合せ式木棺と土器蓋土坑墓）は，最近九州から関東まで各地で確認され，検討が加えられている布留式以前の古墳[注20]であろう。

さて，綾部市内における古墳の出現が青野西Ⅳ期とすれば，それは同時に竪穴住居の小型化や，丹後系から畿内系へという土器の変化と連関する歴史的画期がこの時期にあったと言えよう。換言すれば，綾部地方の弥生時代から古墳時代への移行期（庄内併行期）は，叩き等畿内的要素が目立ち始める前半（青野西Ⅲ期）を古墳出現前夜，社会的な変化も認められる後半（青野西Ⅳ期）を古墳出現期――古墳時代の始まり――と意義づけられるのである。

しかしながら，中丹地域では，これに続く布留式併行期に典型的な前期古墳は見られないのであって，真に「古墳時代」の名に相応しい古墳としては，福知山市の八ケ谷古墳や綾部市多田町の菖蒲塚・聖塚古墳の出現を待たねばならない。これら中期初頭ないし前半になってようやく現われる古墳が，埴輪や段築・葺石・周濠といった畿内的要素を備えながらも大型の方墳であって，前方後円墳の出現は更に遅れるという当地域の古墳時代の特性に関しては，いわゆる前期型古墳の不在という点とあわせ，論議が続くであろうが，本稿の主題を大きく外れており，ここでは綾部地方の古墳時代の始まりが上述のように考えられることを記して，大方の御批判を仰ぎたいと思う。

（小山雅人＝当センター調査課調査員）

注１　以上挙げた遺跡群については，『綾部市文化財調査報告』第２～５・８～10集　綾部市教育委員会　1976～1983　及び中村孝行「青野・綾中地区遺跡群の調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第３号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター（以下「京埋文センター」と略す）1982.3　Ｐ．18～Ｐ．24 を参照。

注２　小山雅人「青野遺跡第８次」（『京都府埋蔵文化財情報』第６号　京埋文センター）1982.12　Ｐ．14～Ｐ．15

注３　木下　忠『埋甕―古代の出産習俗』雄山閣　1981　Ｐ．37～Ｐ．54 に詳しい。

注４　特にＡ地点第11号とＩ地点のＨ１。注１文献の第２集と第３集に報告。

注５　都出比呂志「竪穴式住居の周堤と壁体」（『考古学研究』86）1975.10　Ｐ．63～Ｐ．68

注６　奈良県下で類例（弥生中期）があると聞いているが，報告書未刊の由。

注７　藤田　等「弥生時代のガラス」『考古論集（慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集）』1977　Ｐ．155～Ｐ．158

注８　寺沢　薫「大和におけるいわゆる第５様式土器の細別と二・三の問題」（『六条山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所）1980　Ｐ．155～Ｐ．196

注９　釋　龍雄他『青野遺跡Ａ地点発掘調査報告書』（綾部市文化財調査報告 第２集）綾部市教育委員会　1976　Ｐ．32～Ｐ．34　Ｐ．57 第32図36

注10　中村孝行「青野遺跡第４次発掘調査概報」(『綾部市文化財発掘調査報告』第８集 綾部市教育委員会）1981　Ｐ．11～Ｐ．23

注11　小山雅人「綾部市青野西遺跡出土の古式土師器」（『第１回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』（財)大阪文化財センター）1983　Ｐ．53

注12　注10文献　Ｐ．25 第15図43

注13　堤圭三郎「成山古墳発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1966)』京都府教育委員会）1966　Ｐ．40～Ｐ．45

『両丹地方の方墳』（常設展資料４）京都府立丹後郷土資料館　1978　Ｐ．9～Ｐ．10

注14　平良泰久「国家形成期の日本海」（『歴史公論』88）1983.３　Ｐ．60

奥村清一郎「丹波」（『歴史公論』88）1983.３　Ｐ．96

注15　『丹後郷土資料館収蔵資料目録』第１集　京都府立丹後郷土資料館　1980　Ｐ．78～Ｐ．80

注16　都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」（『考古学研究』26-3）1979

注17　間壁忠彦・間壁葭子『吉備古代史の未知を解く』新人物往来社　1981　Ｐ．18～Ｐ．28

注18　間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」（『倉敷考古館研究集報』第13号　(財)倉敷考古館）1977　Ｐ．40

注19　柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982　Ｐ．917

注20　石野博信「古墳出現期の具体相」（『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室）1983　Ｐ．111～Ｐ．130　cf. 近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店　1983　Ｐ．140～Ｐ．210

丹後木橋城跡試掘調査報告

飛　田　範　夫

1. はじめに

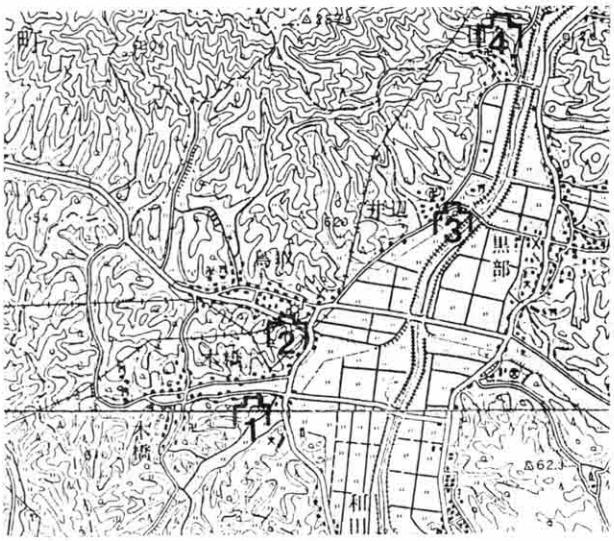
木橋城跡（きばしじょう）は京都府竹野郡弥栄町字木橋小字梶谷に属し，東西に延びる起伏の緩やかな丘陵地を占めている。丹後国営総合農地開発事業に伴い，昭和54年度事業としてこの地域の主要部分が削平開発されることになったので，工事着手前に試掘調査を行うことになった。

現地における試掘調査は，弥栄町教育委員会が主体となり，昭和55年３月27日より４月８日まで行われたが，この調査に際しては調査委員会が組織され，(注1) 調査の基本的事項について協議が行われた。調査期間中，調査補助員(注2)として参加された有志学生及び地元の多くの方々(注3)の協力をいただいた。

2. 調査地の位置と歴史

竹野郡弥栄町の西部，竹野川流域の西側丘陵地の谷間に木橋の集落があり，木橋城はこの集落の南側に東西に長く続く標高 40 m 程の丘陵地に位置している。今回の調査は，開発予定地の西側に当る木橋城の本丸跡と考えられる部分を対象として行った。

木橋そのものについて記した文献は少なく，鎌倉時代以前のことは明らかでないが，長禄３（1459）年に書写された『注進丹後国諸庄郷保惣田数帳目録』（正応元（1288）年作成）の竹野郡の条に「一　木橋村　廿五町三段四十五歩　八幡領」とあることから，1280年代には，木橋の地は石清水八幡宮領であったことがわかる。



第１図　木橋城跡周辺図（1/50,000）
1. 木橋城跡　2. 鳥取城跡　3. 井辺城跡　4. 国久城跡

木橋城については，『丹後国竹野郡誌』（大正４年刊）によると，吉岡長右衛門氏に伝わる系図をもとに「吉岡伊予守は木橋城主にして長享２（1488）年正月逝去し，其子伊予守高善落城して民家に下る。現代長右衛門は伊予守よ

り十七代なりといふ」と記されている。

この吉岡家については，天文7（1538）年の『丹後御檀家帳』に

「一，きばし　　家数百二十軒許

吉岡（かふおや）治左衛門　岡本和右衛門　岡島七郎兵衛　しん蔵主……」

とあって，1540年頃には吉岡家が木橋での有力者であったことが窺われる。

『京都府遺跡地図』（昭和47年刊）によると，弥栄町内には10か所の城郭が記録掲載されており，その分布状況を見ると，竹野川流域ではほぼ現在の大字ごとに一つの城が配置されていることがわかる。これらの城はほとんどが室町期のもので，織田信長の命を受けて丹後に進入した細川藤孝（幽斎）によって天正10（1582）年に亡ぼされた一色家関係の城として，和田野城・堤城・吉沢城・黒部城などがあげられる。木橋城が，これ以前に落城したという記録からすると，その落城の理由は特殊なものであったことになる。

以上のことからすると，1400年代には木橋の地は石清水八幡宮の所領であったが，その後，吉岡氏の支配するところとなり，その吉岡氏は，細川藤孝による丹後攻略以前に一色氏支配下での内紛によって滅ぼされたものと推定される。

木橋城の遺構については，先に『丹後国竹野郡誌』に実地聞書として，

「木橋城に二層より成る城址あり，上層は円形にして約二反歩もあらん，天正三年迄木橋吉岡家の祖吉岡伊予守の居城なりしと云ふ」

とあるから，地元では以前からよく知られていたのであろう。また，森岡左衛門氏が昭和初期にこの丘陵最高部に「古城本丸跡」と刻んだ石碑を建立されたことにより，地元の人びとに親しまれてきたのである。

3. 試掘調査の結果

木橋城の本丸跡と推定される丘陵頂部は，標高が 40 m あり，頂上部を平坦に造成し，南東に張り出した部分に，高さ 1 m・長さ 10 m の土塁を築いている。頂上部は2段に分かれ，1段高い「古城本丸跡」の石碑の立っている部分は，東西径 20 m・南北径 30 m，面積 600 m² ほどあり，1 m ほど下った北部は東西・南北それぞれ径 20 m，面積約 400 m² の平坦部となっている。この本丸の周囲は急傾斜をなし，防御に適しており，最高部の本丸跡の東南西3方はともに約55度の勾配をもっている。

現況植生は，石碑付近及び南・西側斜面がクヌギ・カシなどの雑木林となっていて，東・北側にはモウソウチクの林が広がっていた。なお，東側には直径 30～50 cm ほどのシイの大木5本があったが，伐り倒した後の切株の年輪を数えた結果100～200年を経過したものであることがわかった。

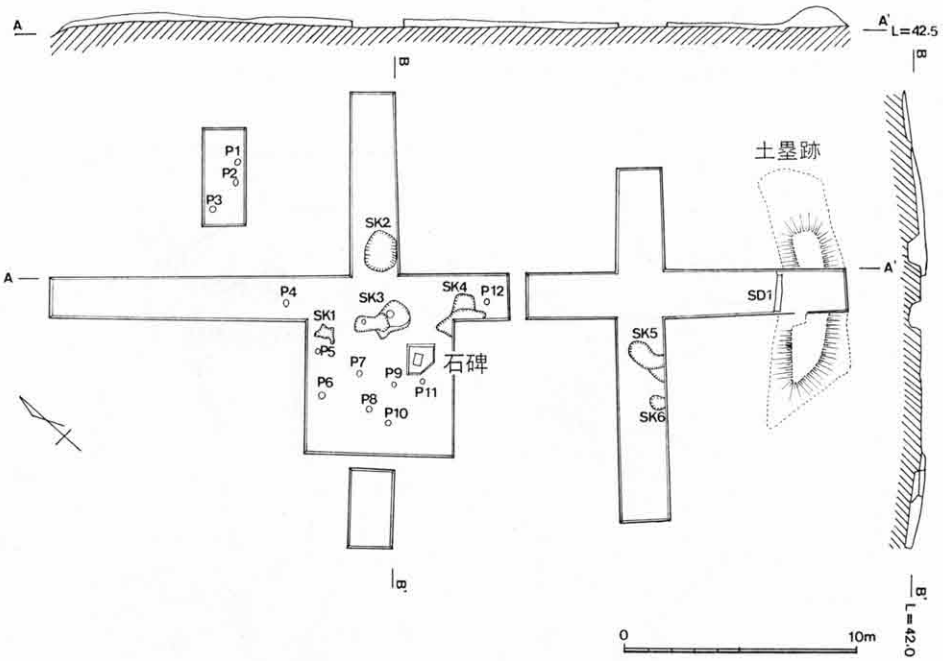
第2図 木 橋 城 跡 地 形 図

今回の造成工事は，この本丸部分を切り崩して南側の谷を埋めて農地を確保するという計画であったので，工事に先立って本丸跡の部分を試掘調査することになった。

調査にあたって，本丸跡の部分に，地形にあわせて土塁の中央を切るようにして南北に1本，これに直交する東西方向に2本のトレンチを入れ，また，木戸口跡と考えられる部分に1本のトレンチを入れた。

土塁は，トレンチ断面の観察により，赤褐色粘質土を盛って築いていることが判明した。地山の層の上に直接盛土していることからすると，一度整地して表土層を削ってから土塁を築いていることになる。

南北トレンチと東西トレンチの交点付近で，ピット P7・P8・P9・P10 と土坑 SK 2・SK 3 を検出したので，石碑周辺を掘り広げたところ，第3図に示すようなピット群が見



第3図　木橋城本丸跡実測図

つかった。これらのピットはいずれも直径約 25 cm・深さ約 20 cm の比較的小さなものであり，建物の柱痕としては，配置及び間隔が不規則であるから，むしろ柵などの簡単な施設と考えることが適当であろう。

土坑 SK 3 と SK 4 からは，擂鉢の破片が出土した。また，東側のトレンチ内で検出した土坑 SK 5 には灰が詰っていた。SK 3 と SK 5 の底部には直径約 10 cm の焼けた円礫がそれぞれ数個ずつ置かれていた。土坑は 6 か所で検出されたが，平面形も深さも不規則であり，その用途を明らかにすることはできない。SK 3 と SK 4 で出土した擂鉢は同一個体ではないが，室町時代のものと考えられることから，これら土坑もほぼ同時期と考えることはできるが，これらが城郭とどのような関係を持つものかは明らかにすることができない。

また，木戸口と思われる部分に入れたトレンチでは，P1・P 2・P 3 を検出したが，これらも本丸跡のものと同様であり，あるいは柵列がここまで延びていたと考えることもできる。

試掘調査の結果を基に全体を見ると，現地表面から平均して 30 cm 下までが耕作土層で，昭和10年代に耕作していたという地元の人々の話と一致する。この耕作土層のすぐ下は黄褐色砂質土及び赤褐色粘質土の地山となっている。検出したピット及び土坑は直接城と関係ある遺構か否か判然としないが，少なくとも本丸跡に建物跡の遺構を確認すること

はできなかった。建物跡は，おそらく耕土層かあるいはそれ以上の層にあったため，その柱痕・礎石などは耕作等によって破壊・削平されてしまったものと考える。

4. 城郭付近の実測及び踏査

試掘調査の期間中，本丸跡の部分を中心に，今回削平されるところを東西・南北ともに約120 m の範囲を平板測量した。その結果は第2図に示すとおりである。さらに，調査期間中，作業の合い間に付近一帯の踏査を試みた。その結果，この本丸跡を頂点として東に延びる丘陵には，階段状に郭が形成され，各郭の平坦部を利用した墓地が続いているが，丘陵東端部の「八幡宮跡」の石碑が建立されている部分は，竹野川流域の平野に突き出ていることがわかった。さらに，本丸跡の南の谷を隔てたもう一つの丘陵が同様に東西へ延びている。ここは小字「松ケ尾」といい，その最高部分は墓地となっているが，東側に向って階段状に平坦部が続き，郭を形成していたことが明らかである。

以上の踏査結果から，木橋城は，今回試掘調査した本丸跡と推定される部分を頂点として，浅い谷を挟んでV字状に東方へ向って延びる丘陵を利用して築かれた小規模な連郭式の城郭である。本丸跡の南側と西北方にある平坦部は，帯曲輪の役割を果したと考えられる。また，本丸跡から北へ向って1段下り，さらにやや東北方へ延びる丘陵部分も3段の平坦部があり，その先端部の一角に祠跡があり，祠跡の近くには瓦の破片で埋められた井戸跡が残存している。この小祠も井戸も城と直接関連のあるものと考えてよかろう。

また，現在は，本丸跡北西の公民館から本丸跡と北西郭の間を掘割り状の小径が通り，本丸跡の西南部へ出て，そこから折り返すように本丸跡に登っているが，この掘割が本丸と西北郭を分断する形になっていることから，後世につくられた可能性が強い。当時，集落と本丸を結ぶ直線通路は，祠跡，井戸跡のある郭から階段状につくられた各郭を経て，本丸に通じていたものと考える方が妥当であろう。

付近の字名を調べた結果，本丸跡の一部とその北方一帯が「城ケ尾（しろがお）」，本丸跡の南半分とその南の谷が「梶谷（かじたに）」，その東方が「金久僧（かなくそ）」，本丸跡北側の公民館付近が「堂縄手（どうなわて）」などとなっており，城に関係の深い地名が残っていることも明らかになった。

ところで，木橋公民館には木橋日吉神社にあった天明元（1781）年頃の木橋地域の古図が保管されている。この古図は，縦 175 cm・横 185 cm の和紙に彩色が施されているが，どのような理由によるか不明だが，木橋城跡に当る部分が切り取られている。しかし，この古図で，江戸時代中期の木橋の集落が現在の姿に近いものであったことがわかる。すなわち，木橋城の北側の丘陵の麓に大きな集落があり，城の西側の大慶寺付近にも集落が存在している。これらの集落についてみると，現在，木橋城跡にある墓地は，江戸中期以降

のものばかりであるのに対し，北側の集落の背後の丘陵にある墓地にはそれ以前の古いものが多い。このことからすると，城の裾の北側及び西側は日陰になるために，居住地区として適当でなかったと考えられる。室町時代の集落は，木橋城のある丘陵のさらに北側にある丘陵の南側の麓にあり，その城主も平時においては集落の中央にある館に住み，戦時の場合だけに城に立て籠ったものであろう。城跡も全体として小規模なものであり，各郭の面積も狭小であることから推測すると，そこに建てられた建物も，平和な村の最後の砦とするにふさわしい小屋組み程度の小規模なものではなかろうか。

5. おわりに

以上，試掘調査及び付近の踏査等の結果を基にして，推論をまじえて述べたが，発掘によって検出したピット・土坑などの遺構が直接城跡と関連するものか否かを明らかにすることはできなかった。

中世山城跡の発掘調査は，これまで類例に乏しい。京都府下の中世山城跡の発掘調査の例としては，これまでに与謝郡加悦町金屋比丘尼城跡，亀岡市笑路城跡，同市浄法寺城跡，綴喜郡田辺町都谷館跡など数例があるにすぎない。もちろん，丹後半島では今回の調査がはじめてであった。このように中世山城跡の調査はまさに緒についた段階である。この時期に木橋城の本丸跡が，削平されることになり，たとえわずかの期間にせよ，事前に測量及び試掘調査が実施できたことは好運であったと言わねばならない。しかし，今回の調査結果からしても，単なるトレンチ調査では，遺構の性格等を明らかにすることは困難であることがわかった。今後は，各地で丘陵上にある中世山城跡にも開発の手が伸びることが予想されるが，その場合，削平される部分の全面的発掘調査が行われることを期待する。今回の木橋城跡の試掘調査の結果は，決して十分なものであったとは思えないが，今後の中世山城跡の調査に関し，参考になれば幸いである。

なお，この報告は，試掘調査終了後，調査を担当した中谷雅治氏の助言を受けながら，発掘調査概報として，昭和55年8月に筆者がまとめたものであるが，本文中にも記したような中世山城跡の調査の機運が熟していない時期であったため，印刷・刊行の機会に恵まれず今日に至った。このたび，京都府教育委員会及び弥栄町教育委員会の了解を得て，本誌に掲載していただくことになった。試掘調査を担当した者として，その報告を掲載していただいた本誌編集部の方々に厚く感謝したい。

また，その後各地で中世城館跡の発掘調査が相次いで行われ，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが，昭和58年5月21日に開催した研修会では，その資料の中に17遺跡

21例の調査例がまとめられ，飛躍的に調査例が増加していることを付加しておく。

（飛田範夫＝飛田庭園研究所々長）

注1　調査委員会

委員長	安達光愛（弥栄町教育委員会教育長）
委員	芦田行雄（京都府文化財保護指導委員）
〃	田家信治（弥栄町助役）
〃	堤　圭三郎（京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係長）
〃	堀井　馨（弥栄町文化財保護委員）
〃	百田昌夫（京都府立丹後郷土資料館資料課長）
〃	森岡良策（土地所有者代表）
〃	森田正敏（弥栄町木橋区長）
〃	和田達男（京都府丹後教育局教育課長）
事務局幹事	深田一男（弥栄町教育委員会教育次長）
〃	高倉仁三郎（　〃　社会教育指導委員）
調査担当者	中谷雅治（京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係技師）
〃	飛田範夫（　〃　）

注2　調査補助員　小山雅人・増田孝彦・加藤栄司・岡田晃治・田村　稔

注3　協力者　森田正敏・吉岡健次郎・井上博仁・角江弁蔵・竹内昌明・長砂元行・藤原治・藤原信一・藤原佳弘・平村春一・森岡信明・森田　稔・吉岡晶信・吉岡　計夫・吉岡邦明・吉岡塡視・吉岡治作・吉岡弘行・吉岡正和・吉岡正人・吉岡美樹雄・吉岡慎人・吉岡靖文・吉岡好文・吉岡米三郎

（以上，いずれも敬称略）

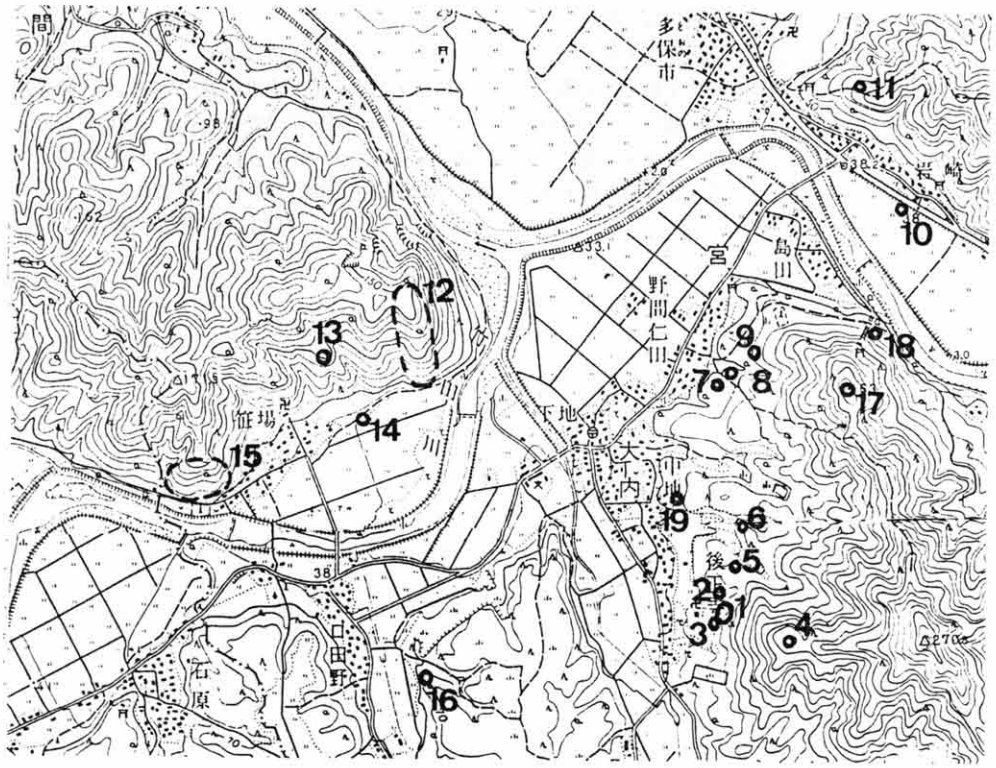
洞楽寺北遺跡・洞楽寺遺跡発掘調査概要

岩松　保

1. はじめに

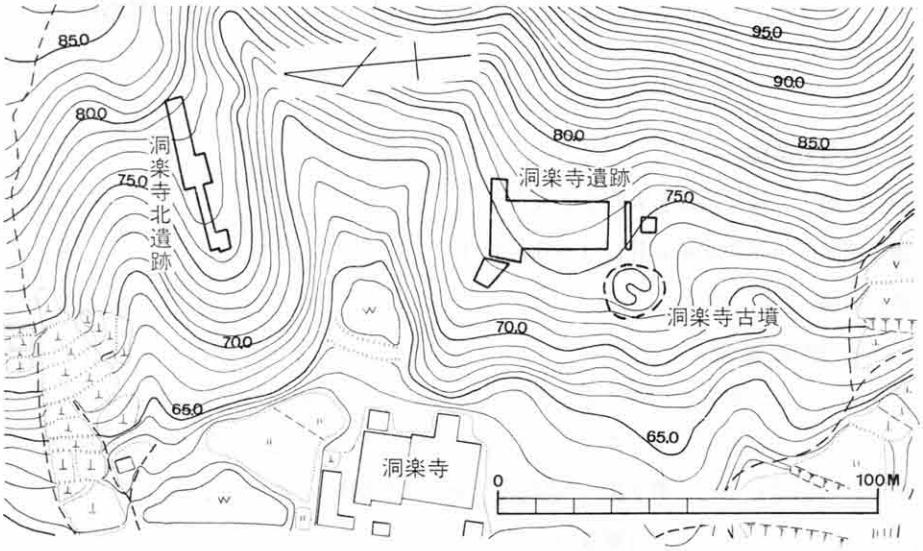
今回の報告は，近畿自動車道舞鶴線（以下，「近舞線」と略す）建設に伴う事前調査の概要である。近舞線関係では，今年度の調査として，洞楽寺北遺跡・洞楽寺遺跡・ケシケ谷遺跡・薬王寺古墳・薬王寺古墓の発掘調査が予定されているが，洞楽寺北遺跡・洞楽寺遺跡の現地調査が終了したので，あらましの報告を行う。

近舞線建設予定地内の発掘調査は，昭和56年度から進められているが，その間にも新たな遺跡が発見され(注1)，発掘調査の必要が生じた。今回報告の両遺跡は，当初，古墳と推定されたが，昨年度の試掘調査では古墳を示唆する遺構・遺物の発見がなく，古墳でないこと



第1図　周辺遺跡（古墳時代関係・2を除く）分布図（1/25,000）

1. 洞楽寺遺跡　2. 洞楽寺北遺跡　3. 洞楽寺古墳　4. 古　墳
5. 後青寺古墳　6. 小屋ケ谷古墳　7. 姫塚古墳　8. 男塚古墳
9. 城ノ尾古墳　10. みこし塚古墳　11. 薬王寺古墳　12. 庵戸山古墳群（円墳11基）
13. 庵戸山古墳　14. 庵戸山古墳　15. 境谷古墳群（円墳6基）　16. 口田野古墳
17. 古　墳　18. 古　墳　19. 古　墳



第2図　洞楽寺北遺跡・洞楽寺遺跡位置図

が確認された。そこで先の報告で洞楽寺2号墳・洞楽寺3号墳と呼んだ遺跡に，それぞれ洞楽寺遺跡・洞楽寺北遺跡という名称を新たに与えることにした。

2.　洞楽寺北遺跡

所 在 地　福知山市字大内小字後正寺

調査期間　昭和58年5月17日～6月30日

調査面積　160 m²

(1)　調 査 概 要

洞楽寺北遺跡は，洞楽寺古墳・洞楽寺遺跡の北側の尾根上に位置し，約 70 m 隔たる。

昨年度の試掘調査で，溝・土坑状の落ち込みが見つかったため，今年度は尾根上の緩傾斜面のほぼ全域を調査した（第2図）。

遺跡の土層は，表土―暗黄褐色土―黄褐色土（地山）で，表土下約 10 cm で地山面に達する。調査地の北辺に沿って，東西の溝状の落ち込み，東側でピット（共に遺物なし），西端で土坑1（昨年度試掘分，土器片2点出土）を検出した。

(2)　小　　結

今年度の調査では明確な遺構の検出はなかったが，東西方向の溝状の落ち込みは，土層中に礫・砂・粘土を含まないことから，排水等のものとは考えにくい。また，周囲と区画する溝と考えるにしても，建物跡等の遺構がなく，区画すべき対象物が判然としない。以上のことと，尾根筋に平行していることとを考えあわせると，「道」と考えるのが妥当

であろう。また，ピットや土坑は，遺物も僅少で，まとまりがなく，その性格は不明である。

3. 洞楽寺遺跡

所 在 地　福知山市字大内小字後正寺

調査期間　昭和58年5月17日～6月30日

調査面積　370 m²

(1) 調 査 概 要

洞楽寺遺跡は，洞楽寺古墳の所在する台地上全域がその範囲と考えられる。今年度の調査は，昨年度の試掘トレンチを中心として平坦面のほぼ全域と，洞楽寺古墳の東側にトレンチを設定して行った（第2図)。遺構は，竪穴式住居跡2棟，土坑・ピット7基，溝1条，落ち込み2か所を検出した（第3図)。

2棟の住居跡は調査地の北側で，約 6 m 隔てて検出した。

SB 02 は，調査地の北東端にあたる。北半は削平を受けていた。住居跡の南東部に張り出し部があり，そこにかまどが設けられている。かまどの焚き口は，1 m×2 m にわたって床面より 10 cm 程度低くなっている。床面上には須恵器片・土師器片が，床面近くの埋土中からは滑石製紡錘車が，それぞれ出土した。

SB 03 は，西辺が削られているが，一辺 2.9 m の方形の住居に復元できる。遺構の残りは悪く，深さ約5 cm 程度しかない。住居跡中央部の北側にはかまどがある。

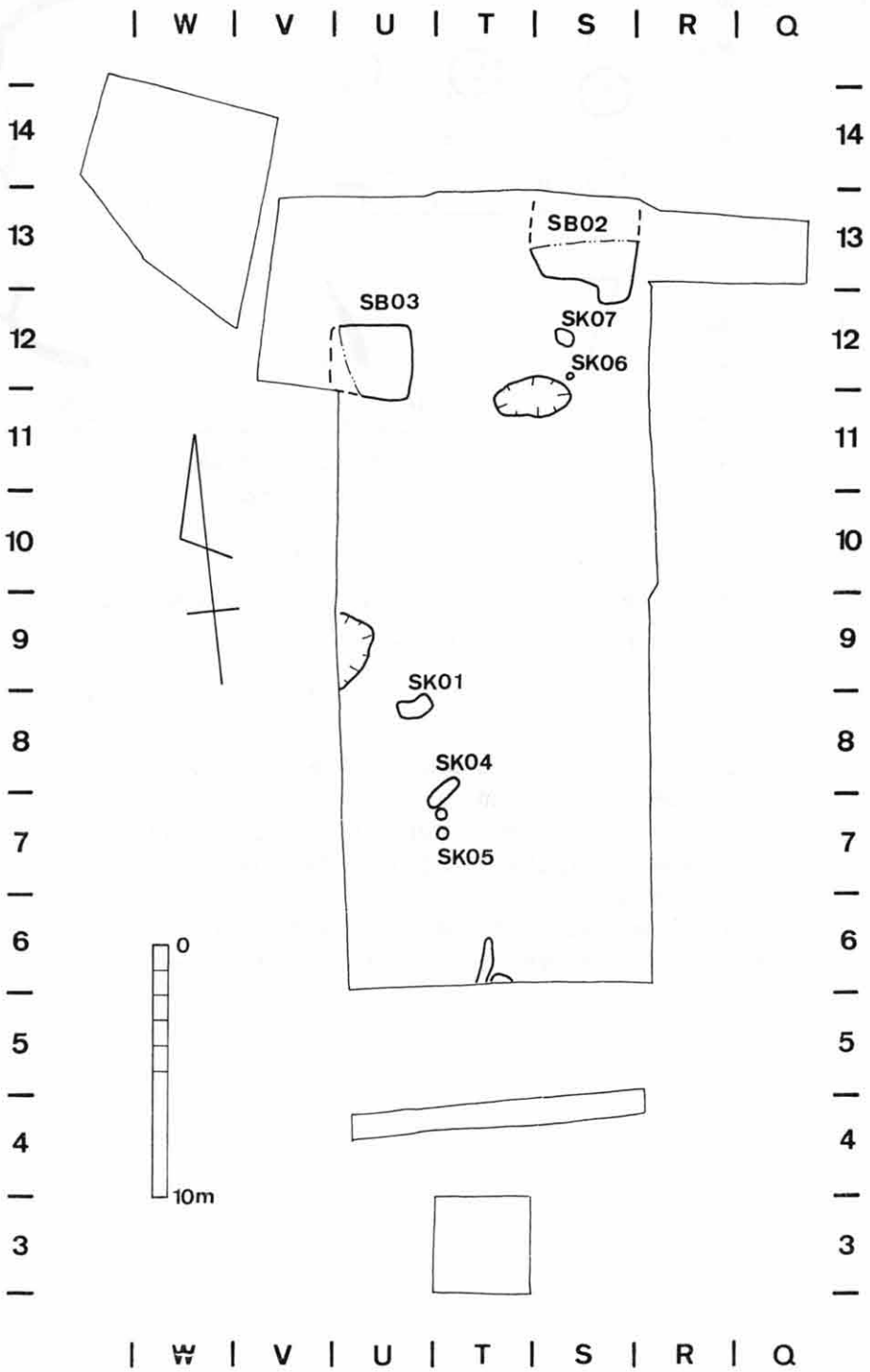
SK 01•04•05 は，調査地の南側で検出された。時期は，出土土器から住居跡と同時期のものと判断できる。SK 06 からは炭が，SK 07 からは糸切り底をもつ土師皿片が，それぞれ出土した。

遺物は，須恵器・土師器の土器片，石製品（紡錘車)，土製品（土錘）等が出土している（第4図)。

(2) 小　　結

昨年度の試掘調査によって，当遺跡は集落跡であることが判っていたので，洞楽寺古墳と集落との関係に関心がもたれた。また，すでに破壊された古墳の有無の確認も期待されたが，それに類する遺構・遺物は検出できなかった。

洞楽寺古墳には，陶邑編年(注2)のⅡ-3・4段階の須恵器が副葬されていたが(注3)，この集落跡からはⅡ－1段階の須恵器が出土した。この台地上では，集落→墓域という推移を経たわけである。周辺の古墳でこの集落と同時期のものは後青寺古墳(注4)で，当遺跡から約 300 m 北の丘陵にある。

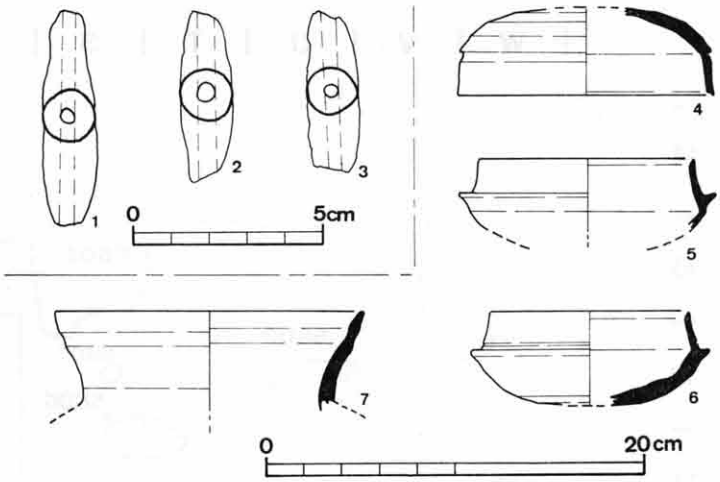


第3図 洞楽寺遺跡遺構平面図

3. ま と め

洞楽寺遺跡と洞楽寺北遺跡との関連は，今回の調査では洞楽寺北遺跡の性格が不明なので，現在のところわからない。

近年，近舞線関係で遺跡の発掘調査が進み，福知山市宮・大内地区の弥生・古墳時代及び中世の資料が増加した。今回の調査では古墳時代後期の集落跡の資料を得た。周辺には，第1図にみえるように，多くの古墳が散在するので，当地域の古墳の分布と集落との関係から，古墳時代後期の社会を知る上で，貴重な成果を得たものと考える。



第4図　洞楽寺遺跡出土遺物実測図
1～3．土　錘　　4～6．須恵器　　7．土師器

（岩松　保＝当センター調査課調査員）

注1　岩松　保「福知山市大内周辺の新発見遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第5号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1982.9

注2　『陶邑』Ⅳ（大阪府文化財調査報告書 第31輯）大阪府教育委員会　1979

注3　伊野近富「洞楽寺古墳」(『京都府埋蔵文化財情報』第7号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983.3

注4　辻本和美 他「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1982　P．98～P．102

千代川遺跡第３次発掘調査概要

岡　崎　研　一

所 在 地　亀岡市千代川町小林西芝・湯井巽筋，大井町小金岐北浦

調査期間　昭和57年11月17日～昭和58年３月31日
　　昭和58年５月30日～８月12日

調査面積　3,090 m²（昭和57年度）　2,000 m²（昭和58年度）

1. はじめに

今回の調査は，京都府船井郡日吉町のダム建設に伴う集団移転地造成工事に先だつ事前調査である。

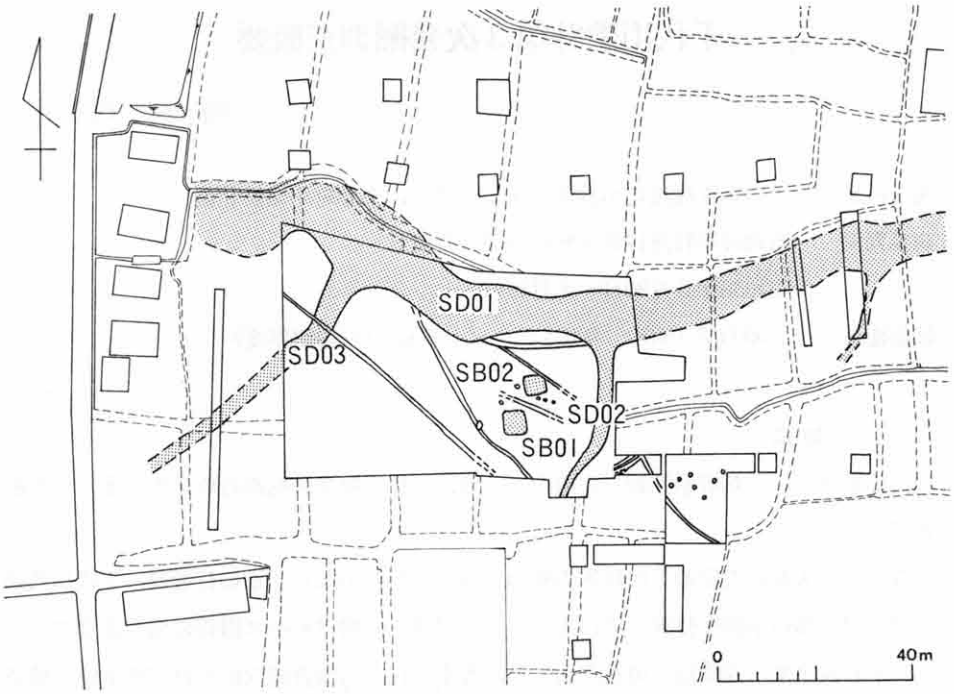
調査地は，大堰川右岸の千代川町小林の集落の西側にあたる。この付近は，千代川遺跡と馬場ケ崎遺跡の中間に位置している。また，国道９号線バイパス関係の発掘調査により，行者山から派生する丘陵沿いの微高地には，弥生時代から鎌倉時代にかけての遺跡が確認されており，今回の調査地周辺にも，弥生時代から歴史時代にかけての遺構が存在するものと考えられた。

2. 調査概要

昭和57年度の調査は，層位及び遺構等の確認のため，20 m 四方に 4 m×4 m のグリッドを設定し，試掘調査を行ったところ，調査対象地の南端で布留式土器片を含む溝 (SD 02) の一画を検出した。そこで，この溝の範囲や規模等の確認のため，約 1,500 m² を拡張した結果，竪穴式住居跡２基と東西方向の大溝 (SD 01) とそれに合流する溝 (SD 02) を検出した。

昭和58年度は，大溝や住居跡が拡張部の西側にも存在する可能性があったので，約 2,000 m² を発掘調査した。しかし，この部分は後世に削平を受けており，残りが悪

第１図　調査地位置図 (1/50,000)



第2図　遺　構　平　面　図

く，大溝の続きと溝（SD 03）を検出するにとどまった。一方，拡張部の東側にトレンチを設定し，大溝の延長を確認した。

3. 検出遺構

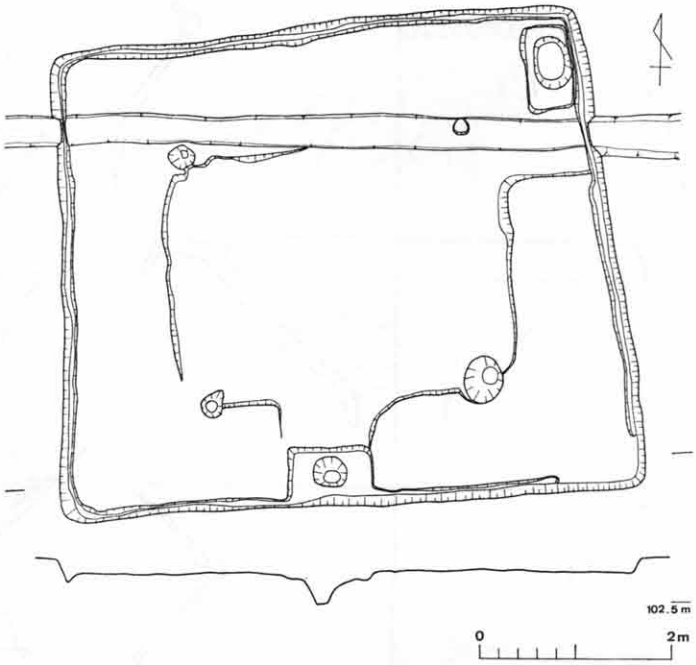
昭和57・58年度の調査で検出した主要な遺構は，竪穴式住居跡2基と幅約10 m の大溝（SD 01）とそれに合流する溝（SD 02・SD 03）である。

SB 01　5.5 m×5.0 m とやや東西方向に長い竪穴式住居跡である。かなりの削平を受けており，壁面の高さは約20 cm である。この住居跡は，四方が中央部よりも一段高くなっており（ベッド状遺構），この四隅から柱穴を確認した。また，住居跡の北東隅と南辺中央部の2か所で貯蔵穴を検出した。床面直上からは，布留式土器片が多量に出土している。

SB 02　SB 01 よりも小規模な竪穴式住居跡で，3.6 m×4.0 m とわずかに東西方向に長い。この住居跡もベッド状遺構を有しているが，SB 01 ほど明確ではない。柱穴は，中央よりやや北側に1か所あるのみで，住居跡に伴うものか明確でない。また，南東隅では貯蔵穴を検出している。住居跡内部からは少量ではあるが，布留式土器片が出土している。

SD 01　竪穴式住居跡の北側を東に流れており，その規模は，幅約10 m・深さ約1.5 m

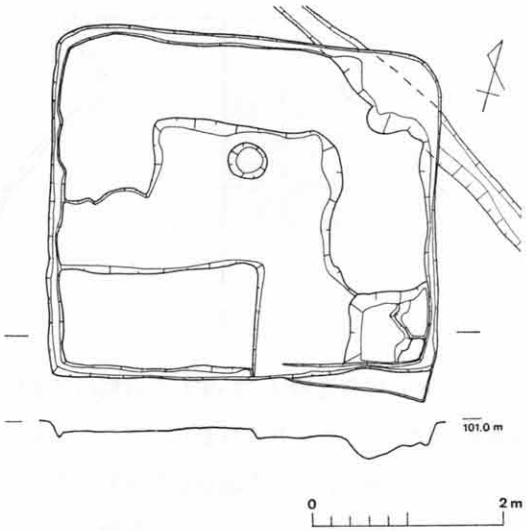
を測る。この溝は，SD 02 と SD 03 の合流点付近で河川改修が行われており，改修時の盛土からは布留式土器しか出土しなかった。このように古墳時代前期以降に部分的に改修を行い，溝として利用したものと考えられる。SB 02 との合流地点より上流では堰状に板を立てて，水量または水流調節を行ったと思われる。溝底からは布留式土器片・杭・板状木製品等が多量に出土したが，流木のように埋っていた。中でもくわやちきりが少数ながら出土した。



第3図　竪穴式住居跡 SB 01 実測図

SD 02　SB 01 の東側を北流し大溝に合流する人工の溝で，規模は広い所で幅約 3 m・深さは大溝に近づくほど深くなり，深い所で約 1.2 m を測る。溝底付近から布留式土器が出土した。

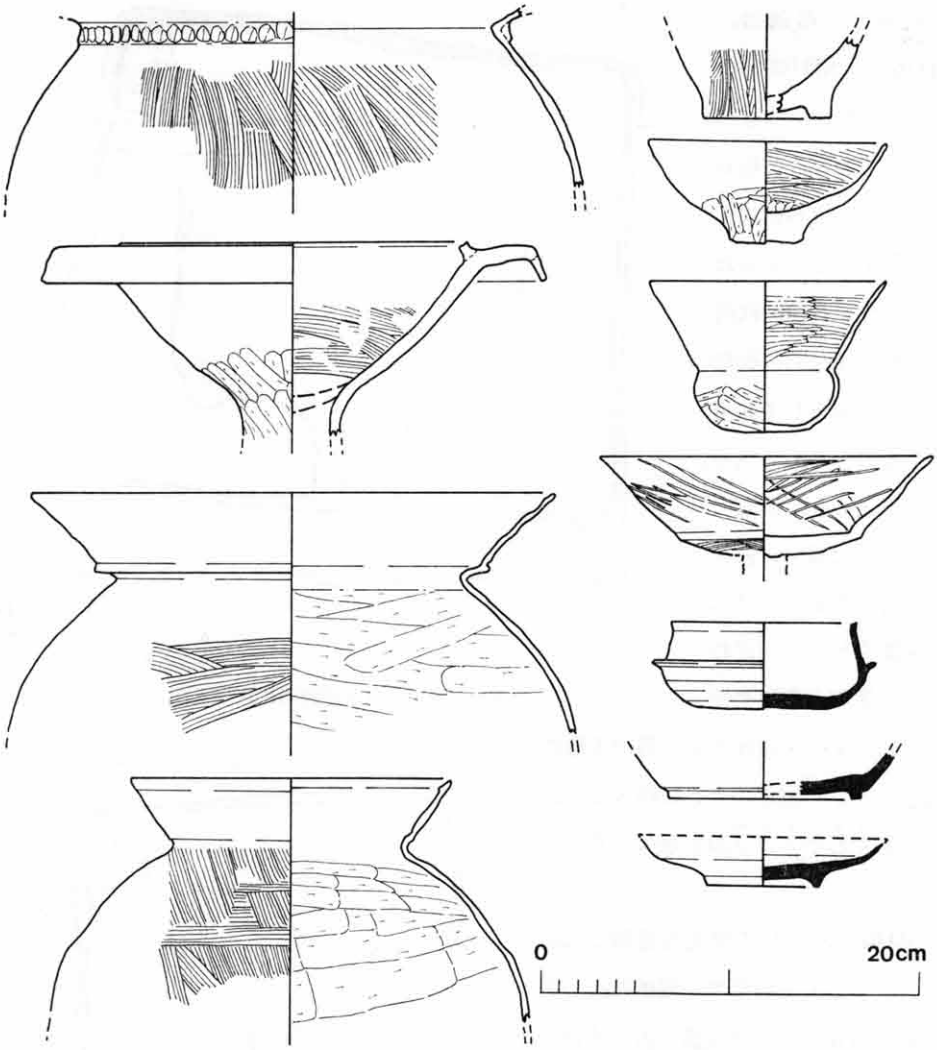
SD 03　SB 02 の西側を北流し，大溝に合流する人工の溝で，規模は，幅約 4 m・深さ約 1.2 m を測る。この溝からは遺物は出土しなかった。



第4図　竪穴式住居跡 SB 02 実測図

4. おわりに

今回の調査によって，調査地の西約 100 m に位置する大池付近を源として東流する大溝と，それに合流する 2 本の溝と，これらの溝に囲まれた竪穴式住居跡 2 基を検出した。こ



第5図　出　土　遺　物　実　測　図

れらの遺構に伴う遺物は，いずれも古墳時代前期のもので，中には大溝出土の弥生中期や後期の遺物もわずかに含まれるが，上流から流れてきた可能性が高い。

竪穴式住居跡を検出した地点が調査対象地最南端であったため，集落の全容を解明することはできなかった。しかし，口丹波地方で初めてのベッド状遺構を持つ竪穴式住居跡の検出，さらに検出状態から環濠集落の一画と考えられることなどからも，これらの遺構のもつ意義は大きい。

（岡崎研一＝当センター調査課調査員）

昭和58年度発掘調査略報

1. 田　辺　城　跡

1.　田辺城跡第３次

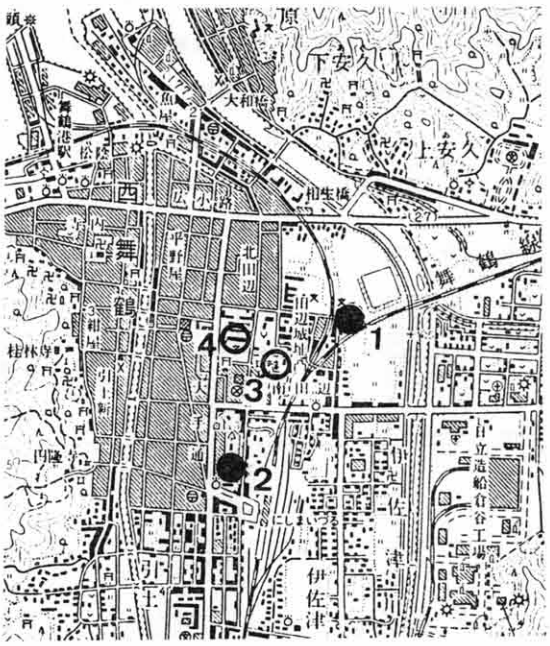
所 在 地　舞鶴市大字南田辺小字大内口下83

調査期間　昭和58年７月５日～７月30日

調査面積　約 200 m²

はじめに　田辺城は，織田信長の命を受けた明智光秀の丹波・丹後平定後の天正12(1584)年に，細川幽斎・忠興父子によって築かれた平城である。明治初年に取り壊されるまでの約280年間にわたって，細川・京極・牧野氏の居城として受け継がれ，その優雅な姿から一名舞鶴城とも呼ばれた。築城当時は，北方に海岸，南方に沼沢地が広がり自然の要害を成すとともに，本丸以下には三重に堀が廻らされ，外部への構えとした。

調査概要　今回，調査対象となった府立盲聾学校舞鶴分校は，城郭域北東隅の三の丸堀跡に位置し，現在も校地を南北に縦貫する小水路が往時の堀の名残とされている。このため，水路に直行する形で，幅４m・長さ各10数 m の試掘トレンチを計３本設定し，当初の堀の確認作業を行った。層序は基本的に，上部から①現在の整地層，②暗灰褐色～茶褐色粘土互層(水田床土層)，③砂層の順で，同砂層中には貝殻や自然木片と一緒に弥生土器・土師器・須恵器等の所属時期の異なる磨滅した土器片が少量含まれていた。



第１図　調査地位置図 (1/25,000)

1. 第３次調査地　2. 第４次調査地
3. 本丸跡　4. 明倫小学校（市教育委員会調査）

城の時期に属する遺物としては，漆器椀残欠・寛永通宝(１枚)の他，瓦・陶磁器類がある。

ま と め　今回の調査で検出した遺構としては，瓦礫を利用した水田の暗渠排水溝と杭列があるが，いず

れもごく新しいものであり，当初目的とした城跡に関するものは検出されなかった。周囲の状況から判断して，堀跡は前述の水路を東限として，当調査地からやや西側(本丸寄り)に位置するものと考えられる。なお，トレンチ最下の砂層から出土した貝殻は，浅海の砂泥地に棲む種類であり，舞鶴湾の入江線の退行を知るうえに興味深い資料となろう。

2.　田辺城跡第4次

所 在 地　舞鶴市大字円満寺小字八丁127

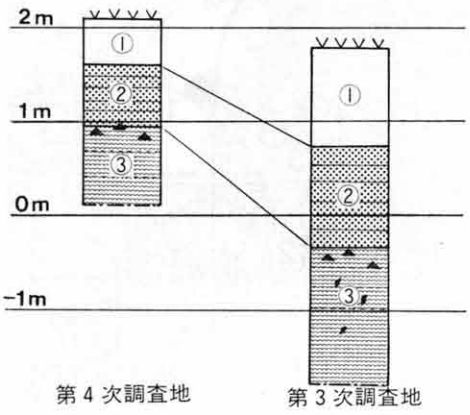
調査期間　昭和58年8月25日～9月29日

調査面積　約 200 m²

はじめに　田辺城は，従来から残存する絵図面や町割りを基に，縄張り等の復原作業が行われてきた。しかし，急激な市街地化に伴い消滅した所も多く，不明な点が少なくない。

城跡の考古学的調査が行われたのは比較的新しく，昭和56・57年に明倫小学校校舎改築に伴う二の丸跡・大草やぐら等の事前調査が市教育委員会により行われている。今回，発掘調査を実施した舞鶴地方検察庁の地は，城跡の北東隅に位置し旧三の丸堀に相当する。

調査概要　調査地東辺に沿って堀の名残である水路が走り，調査は当初の堀西肩部の確認を主目的とした。その結果，旧建物のコンクリート基礎が予想外に深く埋設されており，直接，堀跡の遺構を検出することはできなかった。層序（第2図）は，上から①厚い置土，②茶褐色粘土と砂の互層，③砂礫層に大別される。③の上部からは，盲聾学校舞鶴分校調査時と同様な磨滅の著しい土器片が出土する。検出遺構は，砂礫層を掘り込む中世の土坑1基と杭のみである。なお，水路際に入れた試掘坑から，現在の護岸擁壁に替る以前の石積擁壁の一部を検出した。



第2図　調査地土層柱状図

① 置　土　　② 粘土・砂互層

③ 砂・礫層（遺物包含層）

ま と め　今回の調査地は，先述した通り攪乱が著しく，所期の目的を果すことはできなかった。ただ，調査結果からみて堀の西縁位置は現水路と大きな変動はないと考えられる。

土器片を含む砂礫層は，ある時期の洪水により一気に堆積したものと思われ，従前の各調査地点でも確認されている。広範な分布を示す同層の存在は，今後，築城以前の西舞鶴盆地一帯の景観や形成を知る上に何らかの手がかりとなろう。

（辻本 和美）

2. 土　師　南　遺　跡

所 在 地　福知山市字土師小字南町650

調査期間　昭和58年7月4日～7月28日

調査面積　約 720 m²

はじめに　土師南（はぜみなみ）遺跡は，長田野丘陵の北縁部に位置する。この遺跡の西側では，由良川・土師川が合流しており，この両河川によって形成された沖積平野部には，数々の遺跡が分布している。

この遺跡の北方には愛宕山遺跡があり，弥生時代中期・奈良時代・平安時代の各時代にわたる遺物が採集されている。また，この丘陵には中世後半の山城である前田城跡の存在が確認されている。東方には宝蔵山古墳群・ゲシ山古墳群・南町古墳群等がある。

土師南遺跡では，これまで須恵器片・土師器片等が採集されており，今回の調査で，前述の古墳と何らかの関係のある遺構等の検出が期待された。

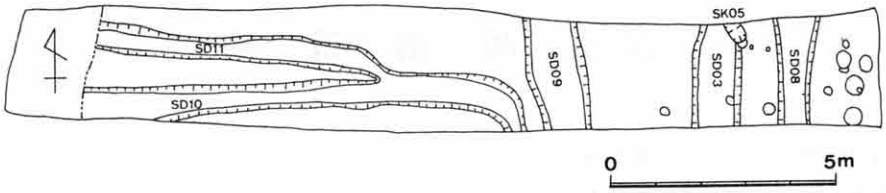
調査概要　今回の調査は，府立福知山高等学校の校舎増改築工事に先立って実施した。調査は，調査対象敷地 720 m² のうち，水道管が埋設されていた中央部を避けて東西に2か所のトレンチ（20 m×8 m・10 m×8 m）を入れて掘削を開始した。ところが調査を進めていく段階で予想を上まわる厚さ 2～2.5 m の盛土層が堆積していることが判明した。そのため，遺物包含層である下層の「黒ボク層」の調査は，土砂の崩壊を防ぐためにこう配をつけ，実際の調査面積は 18 m×2.5 m の範囲にとどまった。

第1図　調査地位置図（1/50,000）

(1)層序　土層は上から盛土(1)，盛土(2)，黒ボク，地山（灰白色粘土）に大きく分かれる。

盛土(1)は，福知山高校グラウンド造成時のものであり，盛土(2)は，明治33～35年にかけて造成された府立第三中学校建設に伴うものと考えられる。

黒ボク層は，上層から黒褐



第2図　遺　構　平　面　図

色土，黒色粘質土，茶褐色土に分かれ，灰白色粘質土に至る。層内からは土師器・須恵器・陶磁器・瓦器などの中世の遺物が出土しており，各層を切り込む遺構が今回初めて確認された。

(2)遺　構

溝1 (SD 03)　幅約1m・深さ約10cmで，南北方向に走る溝である。黒ボクの上層，黒褐色土を切り込む。

溝2 (SD 08)　黒ボクの中層，黒色粘質土を切り込む溝で，幅約50cm・深さ約5cmを測り，南北方向に走る自然流路である。

溝4 (SD 10)・**溝5** (SD 11)　幅約80cm・深さ約10cmの南北方向に走る溝が，西へ向きを変えて走り，溝4（幅約70cm・深さ約10cm）と，溝5（幅約65cm・深さ約10cm）の2つに分かれて走る自然流路である。流れる方向はトレンチ端に近づくにしたがい，しだいに北へと蛇行するようである。

土坑1 (SK 05)　溝1を切る浅い土坑で，性格は不明である。中から江戸時代の陶器片が出土した。他の遺構とは時代を異にするものである。

土坑・ピット　土坑もしくは柱穴と考えられるものが10数個検出されているが，性格は不明である。

ま と め　3回にわたる調査の結果，福知山高校敷地は，西へのびる狭長な丘陵の稜線を削り取って，北に開口する谷へ続く緩斜面を埋めたてて造成したことが判明した。敷地南部では削平により遺構等の検出は不可能であったが，調査地の北部では遺構等が確認され，緩斜面から西及び北へ広がる部分に中世の集落跡が存在していることが予想される。当地は，平安時代末期には藤原頼長の荘園である「土師荘」に属していた。保元の乱(1156年）以降，土師荘は，後院領となるが，出土遺物の中に当時貴重品であった中国製陶磁器片もあることから，荘園との係わりを推察することもできよう。さらに今後，付近の調査資料を待って，文献史料と遺構との関連を考察する必要がある。

（藤原　敏晃）

3. 蒲　生　遺　跡

所 在 地　船井郡丹波町豊田下河原

調査期間　昭和58年7月2日～8月25日

調査面積　500 m²

はじめに　調査地は，京都府の屋根ともいうべき丹波高原に位置する。丹波高原は，南流する大堰川水系と，北流して日本海に至る由良川水系の分水嶺を，その南にひかえる。水系的には由良川水系の最上流域にあたる。

今回の調査は，京都府立須知高等学校の農業実習棟建設工事に伴うものである。蒲生（こもう）遺跡は広範囲な遺物散布地として『京都府遺跡地図』に登録されている。今回の調査地は，その北端の一部である。なお，調査地の北東約 0.5 km の地点には，先年京都大学によって調査され弥生時代と平安時代の遺構・遺物が検出された美月遺跡がある。

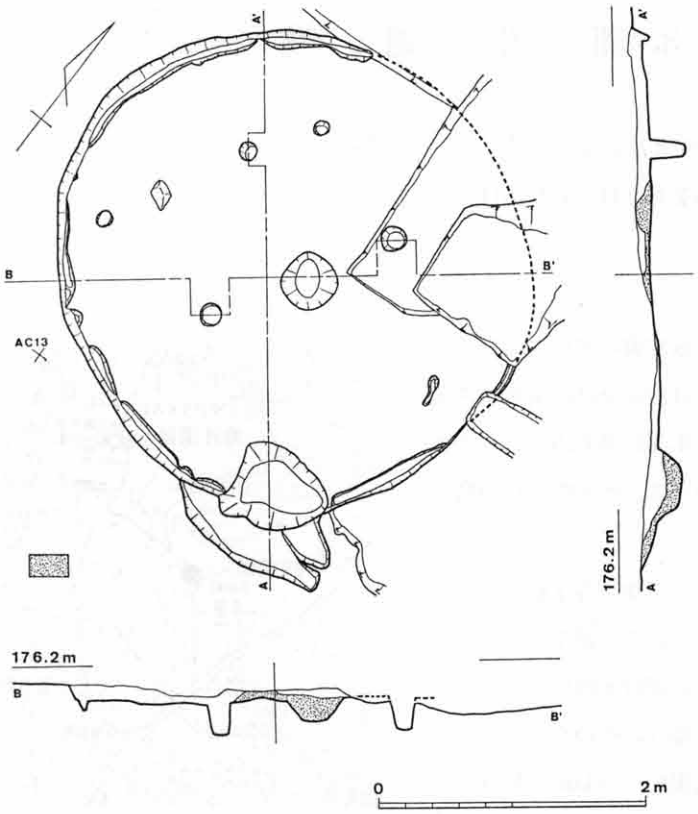
第1図　調査地位置図（1/25,000）

調査概要　調査地は，旧学校建物の基礎による攪乱のために，かなり荒されていた。また，かなり削平されている様子で，調査地のほとんどが，耕土下即地山という状況であった。

検出遺構は，弥生時代のものとして，円形竪穴式住居跡1基・土坑墓とみられる土坑5基がある。また，時代は不明であるが，掘立柱建物跡と柵列を検出した。

竪穴式住居跡は，直径約3.6 m の小形のものである。中央部に炉跡とみられる焼土の堆積がある。壁面に沿ってやや途切れ気味に周壁溝がめぐる。床面には柱穴とみられるピットがある。また，中央部および南西側に貯蔵穴状の掘り込みがみられる。この住居跡内からの出土遺物は，土器片・石器類である。土器は床面から出土したものはない。石器としては埋土から凸基有茎式の打製石鏃と石包丁片が出土している。また，住居跡南西側と北側周壁溝内および付近から剝片が多数出土している。

土坑は長だ円形の平面をもつものである。内部からは，甕・甑などが出土している。遺物が全く出土しないものもある。長さは攪乱のため判然としないものもあるが，約 1.1～



第2図　竪穴式住居跡実測図

1.5m である。幅は約48cm から1m まである。

掘立柱建物跡は，全容を検出していないが，東西棟の建物と推定され，2間×5間以上のものとみられる。北側に1間×3間の張り出しが付く。柱間は1.5～1.8m である。柱穴掘形は長方形である。

柵列は，L字状に柱穴が並ぶ。掘立柱建物とほぼ同様の柱穴掘形をもつ。柱間は1.5～1.8m である。屈曲部付近に柱間が広くなる箇所があり，出入口が想定される。

まとめ　調査地は，平坦な台地から北東方向に向って半島状に尾根が張り出す，その付け根部分にあたる。弥生時代の遺構は，張り出した尾根の部分に土坑があり，その南側の平坦地に続く地点に竪穴式住居跡がある。その状況から，北東側尾根部分は墓地であり，南側の平坦地が集落となっていたものと推定される。今回検出した竪穴式住居跡は，その集落の北端のものであり，今回の調査対象となっていないその南側一帯には集落跡が広がっている可能性が大きい。なお，今回検出した弥生時代の遺構はその出土遺物から，中期のものとみられる。

掘立柱建物と柵列は，伴出遺物がなく，その性格・時代は不明であるが，規模も大きく，柱穴掘形もしっかりしたものである。

（引原 茂治）

府下遺跡紹介

14. 綾　中　廃　寺

綾中廃寺（あやなかはいじ）は，現在，綾部市の中心部にあって，『京都府遺跡地図』に「綾部市―127」と登録されている。寺名は，寺院が綾部市綾中町にかつて存在したということを意味し，現在では，もはやその名も知られないことから廃寺と命名されたのである。

綾中廃寺については，すでに昭和初頭からその存在が知られており，綾中町堂ノ元付近の田畑から古瓦が出土して注目を浴びていた。『三丹蚕業郷土史』・『綾部町史』にはこの寺のことが紹介されていて，創建時期を白鳳ないし奈良時代と推定している。

このように，その存在だけが知られていた綾中廃寺も伽藍配置をはじめとする寺院全体の規模や正確な建立時期・存続時間については全く明らかになっていなかった。しかし，昭和50年代に入ってから，青野遺跡の範囲確認調査の一環として行われた試掘調査によって多量の古瓦・須恵器等が出土し，さらに南北方向の溝を検出したことで再び注目されるに至った。昭和55年度には第１次・第２次発掘調査，同57年度には第３次発掘調査がそれぞれ実施され，注目すべき知見を得た。

第１次・第２次調査では，寺域と推定される区域の北西部を発掘し，瓦積み基壇状遺構・溝などの遺構を検出した。このうち，瓦積み基壇状遺構は綾中廃寺と関係する遺構であるにもかかわらず，その位置づけがむつかしく，綾中廃寺全体を考える上で大きな問題点を提供することとなった。また，溝についても南北のものが重要で，出土遺物から８世紀初頭の溝と考えられている。第３次調査では，東西溝と土坑を検出し，やはり多量の遺物も出土している。

第１図　綾中廃寺位置図（1/25,000）

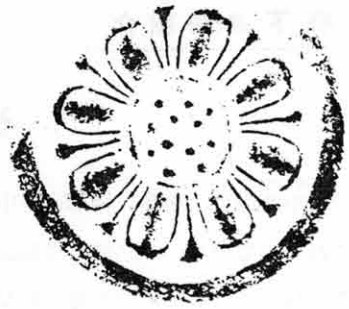
出土遺物のうちで注目すべきは軒丸瓦である。軒丸瓦は大きく３つの型式のものが出ているが，そのうちⅠ類・Ⅱ

類の2型式はいずれも白鳳期（7世紀後半）に属す。また，古瓦とともに出土した須恵器からも，やはり7世紀中頃から後半にかけての年代が得られた。従って，綾中廃寺の創建年代が7世紀後半の白鳳期にあることは確実といえるのである。

そのほか，発掘調査以外ではあるが，推定寺域内から採取された遺物をみると，平安時代にまで下るものの量が少ないと報告されている。こういった点も，綾中廃寺の存続期間を考えるときに多くの問題点を投げかけている。

このように，綾中廃寺については，いぜん中心部の建物遺構などを検出しえていないので，寺院全体の規模や伽藍配置といった全体像を明らかにするまでには至っていない。しかも，推定寺院内及び周辺部は都市化が進んでいるため，現在，その場所に立ってみても，昔日の寺院の様相などは全く窺うことができない。しかし，7世紀までさかのぼることのできる寺院の存在が近年の調査によって確認されたのである。今後の調査の進展で，綾中廃寺全体の規模・寺院としての性格・廃絶状況とその理由といった点，さらに寺院の建築技術の伝わり方の問題などが明らかになるよう，期待されている。

（土橋　誠）



I　類

II　類

III　類

第2図　出土軒瓦拓影

参考文献

『三丹蚕業郷土史』1933
『綾部町史』1958
『綾部市史』上巻　1976
『綾部市文化財調査報告』第4集　綾部市教育委員会　1978
『綾部市文化財発掘調査報告』第8集　綾部市教育委員会　1981
『綾部市文化財調査報告』第10集　綾部市教育委員会　1983
『京都府の古瓦』京都府立丹後郷土資料館　1973
杉原和雄「綾中廃寺出土の遺物について」(『京都考古』12) 1975

15. 上　林　城　跡

上林城（かんばやしじょう）は，綾部市八津合町古城山に位置する山城跡で，別名生貫山城（せいかんざんじょう）として知られている。この城は，中世においては上林地区の土豪であった上林氏の居城と伝えられている。上林氏については，文献史料が少なく，君尾山光明寺に伝わる古文書類にその名がみえるくらいである。それによると，上林氏は，天文年間（1533～1555年）に上林谷で勢力を持っていたが，近江浅井氏の没落を機に急速に勢力が衰えたことが窺われる。

織田信長は，浅井・朝倉氏の討滅後，丹波地方の平定に乗り出すが，その中で天正元(1578)年８月，上林久重は，嫡子久茂を連れて上林の地を去り，翌同２年(1579)には上林下総守の切腹事件がおこっている。このようなことがあって，上林氏は，上林谷からその姿を消すことになる。それ以後，上林谷では仁木久兵衛，川勝秀氏，高田豊後守治忠らが次々と領主になって関ケ原の戦いを迎えたのである。

関ケ原の戦いで勝利して，全国を支配下に治めた徳川家康は，大名の配置換えを大規模に行った。この上林地区もその例にもれず，慶長６(1601)年に藤懸（ふじかけ）永勝が入部し，上林城のふもとに陣屋を設け，以後，幕末までその支配が続いた。藤懸氏自身は，元禄２(1689)年小山藤懸氏500石，宝永３(1706)年赤目坂藤懸氏500石にそれぞれ分家したが，本家の城下藤懸氏は，結局，4000石を領した。

藤懸氏は，慶長７(1602)年に陣屋町ともいうべき町方の保護を行ったため，上林城周辺は，一種の近世城下町風の装いを持つようになった。村方支配に当っては，町方と石橋村とに分けてしまい，石橋村庄屋とは別に町方の年寄・組頭などの役人を置いた。

天保年間（1830～1843年）に町方では大火事があって，１軒を除いてことごとく全焼するという状態になった。その後，町方は，復興したよう

第１図　上林城跡位置図（1/50,000）

であるが，文政8(1825)年には陣屋も全焼するなど，火災にみまわれている。陣屋は，文政10(1827)年に再建されて幕末に至ったようである。

幕末期の陣屋町のようすは，明治元(1868)年，この地区の久美浜県編入に当って作成されたと考えられている『陣屋絵図』によって窺うことができる。それによると，陣屋は，旧上林城のふもとにあって，町屋部とは築地のようなもので区切られていたことが知られる。

これまで，以上のようなことしかわからなかったが，昭和54～56年まで4次にわたった発掘調査で様々なことが知られるようになった。

第2図　上林城跡地形測量図

第1・2次調査では，中世上林城の本丸及びその西側を発掘した。その結果，山側と隔てるために設けられた掘り切りや南東斜面には竪堀を刻んでいたことが知られるようになった。このことは，この地区が本丸防衛上重要な拠点であることを示すとともに，上林城も戦国の動乱期には防衛を固めていたことが窺われる。

第3次調査では，地下倉庫のような石組み貯蔵庫を発見したのが注目される。また，石垣を取り壊したあとも見つかり，上林城が武装解除させられたことが新たにわかった。

第4次調査では，蔵ノ段地区の土塁周辺部を中心に発掘し，土塁東側に比較的しっかりした濠の廻っていたことが明らかになった。そのため，この地区では土塁の西側に館が想定されるなど，中世上林城の状況を考える上で重要な知見が得られた。

以上の4次にわたる調査は，いずれも面積が小さかったため，上林城全体の状況等は明らかにならなかったものの，第2図のように，丘陵頂部の本丸を中心に，その周辺に曲輪があり，山麓部は平常時の居住地として利用されていたと推測できよう。

（土橋　誠）

参考文献

『綾部市文化財調査報告』第6～9集　綾部市教育委員会　1979～1982

長岡京跡調査だより

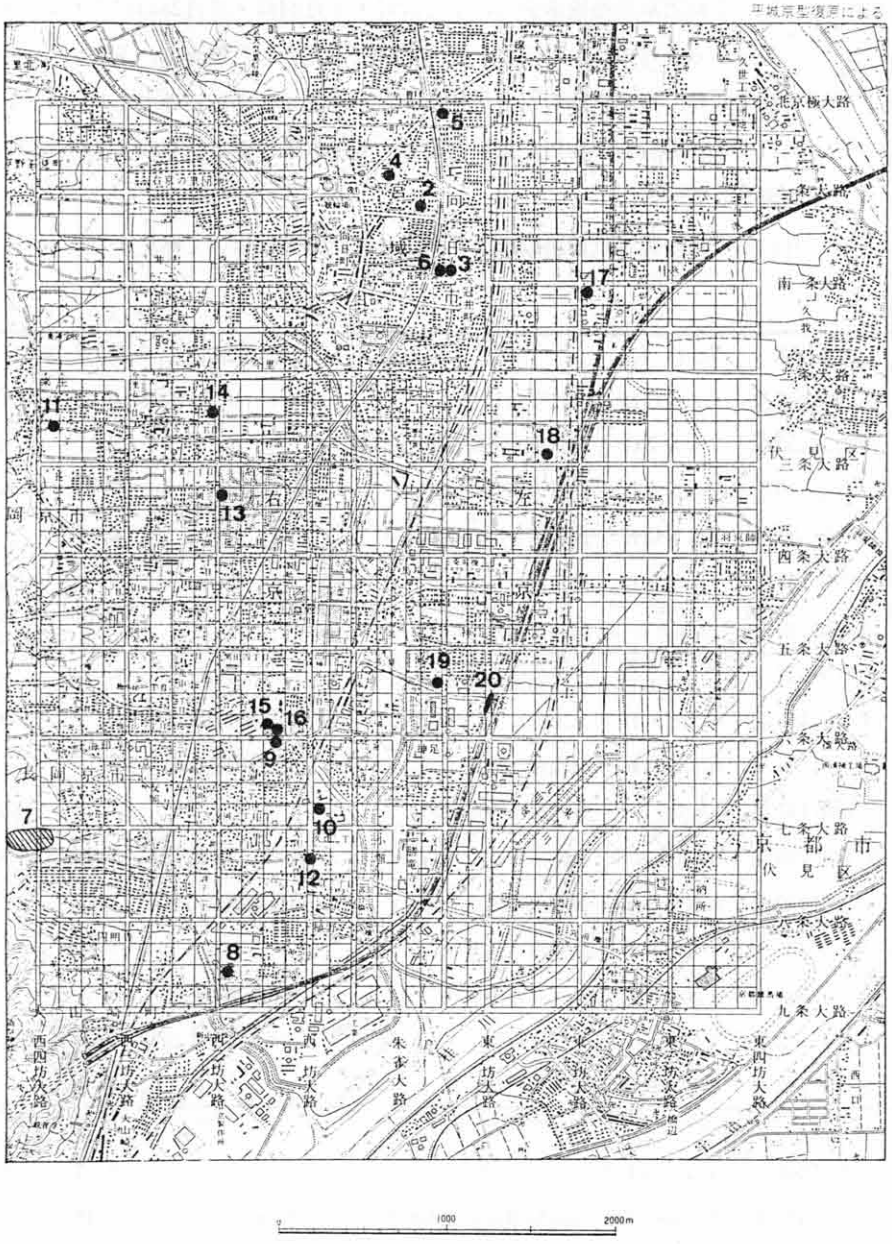
長岡京跡における発掘調査の情報交換を目的として，毎月，当調査研究センターの長岡事務所で行っている長岡京連絡協議会は，７月27日・８月24日・９月28日にそれぞれ開催された。この７月から９月の３か月間に，長岡京跡で実施された調査は，下表のとおりである。長岡宮跡で６件，長岡京跡右京域で12件，左京域で４件の計23件である。また，このほかに，向日市教育委員会が物集女車塚古墳を，長岡京市教育委員会が長法寺南原古墳を，それぞれ調査している。

以下，７月から９月の長岡京連絡協議会で発表された調査について略記する。

	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第133次	7AN13D	向日市向日町北山8	向日市教委	58. 6.27～ 7.21
2	宮内第135次	7AN7G	向日市寺戸町東野辺31-11	〃	6.17～ 7. 3
3	宮内第136次	7AN9L	向日市鶏冠井町祓所	〃	7.26～ 7.30
4	宮内第137次	7AN12E	向日市寺戸町西野辺3	〃	9. 1～
5	宮内第138次	7AN6B	向日市寺戸町渋川1-8	〃	8.10～ 8.22
6	宮内第139次	7AN9L-2	向日市鶏冠井町荒内地内	〃	9.19～ 9.26 9.31～ 10. 5
7	右京第127次	7ANOSZ STE-4	長岡京市下海印寺西明寺 大山崎町円明寺鳥居前	(財)京都府埋	3.17～ 6. 7 7.13～ 8. 8
8	右京第133次	7ANSMD-3	大山崎町円明寺松田15	大山崎町教委	6. 2～ 7.26
9	右京第135次	7ANMMK-2	長岡京市神足3丁目208-6	(財)長岡京市埋	6.15～ 7.15
10	右京第137次	7ANQKS	長岡京市勝竜寺28	〃	7. 6～ 7.28
11	右京第138次	7ANJKK	長岡京市長法寺北畠21	長岡京市教委	7.23～ 7.26
12	右京第139次	7ANQNK-2	長岡京市久貝2丁目	(財)長岡京市埋	7.27～ 8.27
13	右京第140次	7ANIKE-2	長岡京市長岡2丁目	〃	8.11～ 9.10
14	右京第141次	7ANIST-5	長岡京市今里3丁目	(財)京都府埋	8.11～
15	右京第142次	7ANMSI-3	長岡京市開田4丁目428-1	(財)長岡京市埋	9. 5～
16	右京第143次	7ANMMK-3	長岡京市神足3丁目208-4	〃	9.21～
17	左京第100次	7ANEHD	向日市鶏冠井町七反田14-1	向日市教委	5. 2～ 5.27 6.17～ 7.27
18	左京第101次	7ANFOT-8	向日市上植野町大田3-1	〃	8. 5～ 8.18
19	左京第102次	7ANMST-3	長岡京市神足芝本8,9	(財)長岡京市埋	8.18～
20	左京第103次	7ANMYD	長岡京市神足柳田・太田	(財)京都府埋	8. 3～ 8.20

長岡京跡調査地一覧表（58.9.30現在）

長岡京条坊復原図



数字は本文（　）内と対応

宮内第135次　（2）　向日市教育委員会

この調査は，昨年度実施された宮内第123次調査地の隣接地で，長岡京期の掘立柱建物跡を検出した。前後二時期の建て替えがある。前期は，1間×3間の建物跡1棟。後期は，規模は不明ながら3棟の建物跡を検出した。後期の建物跡のうち，西側の建物跡は，南北2間・東西2間以上の規模を有した東西棟で，南北の柱列が宮内第123次調査で検出した建物跡と柱筋をそろえ，柱間間隔も等しいことが判明した。このことから，この建物跡は，宮内第123次調査検出の建物跡と中軸をともにする2間×5間の建物と推定される。

宮内第136次　（3）　向日市教育委員会

内裏築地回廊に当る場所である。回廊の南側柱の根石と思われるものを検出した。

宮内第137次　（4）　向日市教育委員会

学校法人西山学園の校舎改築工事に伴う発掘調査で，現在調査地北西部において，礎石と思われる石列を検出している。

宮内第138次　（5）　向日市教育委員会

弥生時代の前期から中期にかけての自然流路を検出した。

宮内第139次　（6）　向日市教育委員会

宮内第136次調査の西接地である。下水工事に伴い，調査したものである。内裏築地回廊の柱跡からはずれているが，南側の雨落ち溝を検出した。

右京第127次　（7）　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

未買収地であった部分の調査を再開した。この地区では，時期不明の集石遺構を検出した。

右京第133次　（8）　大山崎町教育委員会

弥生時代から古墳時代前期のピット群や流路を検出した。流路は，深さ約140 cmを測り，礫が埋積していた。この流路は，弥生時代中期に半ば埋もれ，古墳時代前期には完全に埋没していた模様である。

右京第135次　（9）　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京期の掘立柱建物跡4棟と柵列等を検出した。

今回の調査地の北端部は，六条大路の推定地であるが，道路側溝らしきものは検出されず，建物跡があったりすることなどから，右京第102次調査で検出された東西溝が六条大路南側溝となる可能性が一段と強まった。

右京第137次　(10)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

2間×5間の掘立柱建物跡を1棟検出した。柱間間隔は東西約2.1m・南北約2.5mを測る。

右京第138次　(11)　長岡京市教育委員会

長法寺七ツ塚古墳群の調査で，4号墳と5号墳の間に幅2mのトレンチを入れた。5号墳の周濠を検出し，幅約3.5m・深さ約0.3mを測る。

右京第139次　(12)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

南北に庇を持つ東西棟を検出した。東西の妻は，調査地外に存在するため，東西方向の規模は不明であるが，トレンチ内で3間分が検出されている。また，ほかにこの建物跡に切られた長岡京期の土坑や，中世の土坑を検出している。中世の土坑の1つから多量の土師器皿が出土した。

右京第141次　(14)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

中世の石敷きと長岡京期の南北方向の溝を検出した。南北方向の溝は，北に対し東へ振っており，西二坊大路西側溝の推定位置からはずれている。

左京第100次　(17)　向日市教育委員会

東二坊大路東側溝と南一条大路南側溝，掘立柱建物跡2棟，柵列等を検出した。東二坊大路東側溝，一南条大路南側溝は，それぞれ幅約1.2～1.5m・深さ約0.2～0.3mを測る。掘立柱建物跡は，2間×3間の南北棟と2間×3間以上の東西棟である。

また，弥生時代の土坑や溝，ピット等を検出している。

左京第102次　(19)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

井戸，土坑，掘立柱建物跡等を検出している。

左京第103次　(20)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

古墳時代中期の東西方向の溝を検出した。幅約2mを測る。

(山口　博)

第2回「小さな展覧会」を終えて

昭和58年8月20日(土)から8月31日(水)までの12日間，京都府教育委員会との共催で，第2回「小さな展覧会」を開催しました。期間中の見学者は，昨年1回目の約330名を大きく上まわる534名という盛況ぶりであったことは，関係者の一員として大変うれしく思っている次第です。

今回の展覧会を開催するにあたっては，第1回目展覧会（57年7月17日～31日）の内容や実施方法等を反省・検討して，一般の方がたにも解りやすくすることを心がけ，より多くの方に見てもらえるようにと努力しました。その第1は，京都府教育委員会に共催をお願いして広い範囲に開催案内ができたことです。第2には，昭和57年度の発掘調査の成果の中で，峰山町古殿遺跡から出土した古墳時代の「案」や，長岡京市今里舞塚古墳から出土した「人物埴輪」，そして昭和56年度発掘した福知山市大道寺経塚から出土した「経巻」すなわち法華経8巻・阿弥陀経1巻を報道機関を通じて広く周知させることができ，これらの遺物を展覧会の重点展示遺物として取り上げたことです。

第3に，開催時期を学校等の夏休み期間にあわせるとともに，土・日曜も開催することにしたことです。

また，展覧会のパンフレットの作成では，読みやすく，理解しやすくすることを念頭に，

第2回小さな展覧会会場風景

むずかしい文字にはふりがなをふるよう心がけ，さらに，発掘調査がどのように行われ，遺物等の整理・復元の過程が理解できるように，写真パネルを展示するとともに，発掘用具の一部を紹介しました。

展覧会場での説明者は，常時調査員が待機して応待できるようにしていたところであり，展示遺物は，年代順に古いものから新しいものへとならべ，それぞれの遺物の出土状況が理解できるように写真パネルを展示しました。

展覧会開催中の見学者数は534名でありましたが，特に小・中・高校の生徒が，先生や保護者と見学に来られていたのが目につきました。

第2回「小さな展覧会」が盛況に終り，反省点や課題を明らかにでき，予想を大きく越す見学者があったことは，次回以降への励みになり，埋蔵文化財についての啓蒙の一助をつとめたものと思うところであります。

最後に，この展覧会をさらに充実し，発展させていきたいと思いますので皆様の御意見・御批評をたまわれば幸甚に存じます。

また，この展覧会の終了後に，京都府教育委員会では，9月8日から9月27日の期間，同委員会庁舎ロビーにおいて，古殿遺跡（峰山町）・太田遺跡（亀岡市）・小屋ケ谷古墳（福知山市）の出土遺物を一般展示していただいたことを報告しておきます。

（長関 和男）

出土遺物を展示した遺跡一覧

太田遺跡（亀岡市薫田野町）	長岡宮跡（向日市寺戸町・森本町）
古殿遺跡（中郡峰山町字古殿）	長岡京跡（向日市・長岡京市）
木津市河床遺跡（八幡市八幡）	篠・石原畑窯跡（亀岡市篠町）
青野西遺跡（綾部市青野町）	下畑遺跡（与謝郡野田川町三河内）
今里舞塚古墳（長岡京市今里舞塚）	後正寺古墓（福知山市字大内）
医王谷古墳（亀岡市下矢田町）	山田館跡（福知山市字大内）
小屋ケ谷古墳（福知山市字大内）	大内城古墓（福知山市字大内）
井ノ内遺跡（長岡京市井ノ内）	伏見城跡（京都市伏見区）
今里遺跡（長岡京市今里）	医王谷焼窯跡（亀岡市下矢田町）

センターの動向（58. 7～9）

1. できごと

7. 2　京都府埋蔵文化財センター建設にともなう起工式挙行さる。

7. 2　蒲生遺跡（丹波町）発掘調査開始～8. 25

7. 4　土師南遺跡（福知山市）発掘調査開始～7. 28

7. 5　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議一於滋賀県大津市一出席（栗栖事務局長，白塚総務課長）

田辺城跡（舞鶴市）発掘調査開始～7. 30

7. 8　木津川河床遺跡（八幡市）関係者説明会実施

7. 13　土師南遺跡（福知山市）関係者説明会実施

7. 15　平安京跡（京都市南区）発掘調査開始

7. 18　上中遺跡（京北町）発掘調査開始～9. 9

7. 26　田辺城跡（舞鶴市）関係者説明会実施

7. 27　長岡京連絡協議会開催

7. 30　洞楽寺遺跡（福知山市）関係者説明会実施

8. 3　長岡京跡左京第103次，雲の宮遺跡（長岡京市）発掘調査開始～8. 19

8. 8　長岡京跡右京第127次（長岡京市，大山崎町）発掘調査終了3. 18～

8. 9　大内城跡（福知山市）発掘調査報告書執筆予定者打合せ会実施

8. 10　青野西遺跡（綾部市）現地説明会開催一約80名参加

8. 11　長岡京跡右京第141次（長岡京市）発掘調査開始

8. 12　千代川遺跡（亀岡市）第3次調査終了5. 30～

8. 23　木津川河床遺跡（八幡市）現地説明会開催一約40名参加

8. 24　蒲生遺跡（丹波町）現地説明会開催一約40名参加

長岡京連絡協議会開催

8. 25　田辺城跡（舞鶴市）発掘調査開始～9. 29

8. 26　千代川遺跡（亀岡市）第3次調査関係者説明会実施

9. 3　上中遺跡（京北町）関係者説明会実施

9. 7～8　全国埋蔵文化財法人連絡協議会研究会一於埼玉県皆野町一出席（白塚総務課長，安田会計主任，堤調査課長，山口調査員，引原調査員）

9. 17　中山城跡（舞鶴市）現地説明会開催一約40名参加

9. 19　千代川・桑寺遺跡（亀岡市）発掘調査開始

9. 20　木津川河床遺跡（八幡市）関係者説明会実施

9.22　平安京跡（京都市南区）関係者説明会実施

木津川河床遺跡（八幡市）発掘調査終了5.17～

中山城跡（舞鶴市）発掘調査終了6.20～

9.26　長岡京跡右京第141次（長岡京市）関係者説明会実施

9.27　田辺城跡（舞鶴市）関係者説明会実施

9.28　長岡京連絡協議会開催

2.　普及啓発事業

7.20　第16回研修会ー於平安会館ー開催（発表者及題名）戸原和人「峰山町古殿遺跡出土木製品について」，山口　博「長岡京市舞塚古墳出土人物埴輪について」，石井清司「亀岡市篠窯跡群出土須恵器について」，増田孝彦「福知山市大道寺跡出土経巻の保存処理について」参加者47名

7.20～31　第2回小さな展覧会開催ー於当センター会議室ー期間中入場者534名

9.30　『京都府埋蔵文化財情報』第9号刊行

3.　人事異動

7.1　久保田健士調査員退職。

9.1　城戸秀夫氏理事を解嘱さる。

9.2　武田　浩氏理事に委嘱さる。

受贈図書一覧（58.6～8）

(財)岩手県埋蔵文化財センター	岩手県埋文センター文化財調査報告書 第31集，同第45集～66集，紀要Ⅲ，考古遺物資料集Ⅲ
(財)いわき市教育文化事業団	龍門寺遺跡の概要
(財)茨城県教育財団	新池台遺跡，大谷津B遺跡，平台遺跡，鹿の子C遺跡，木葉下遺跡Ⅰ（窯跡），ツバタ遺跡・高山古墳群，年報2　昭和57年度
(財)栃木県文化振興事業団	自治医科大学周辺地区昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概報
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	清里・庚申塚遺跡
(財)君津郡市文化財センター	年報　No.1・研究紀要Ⅰ，青柳向台遺跡発掘調査報告書，清水川台遺跡発掘調査報告書，塚原遺跡発掘調査報告書
(財)千葉県文化財センター	研究連絡誌 第1号～第4号
神奈川県立埋蔵文化財センター	神奈川県立埋蔵文化財センター年報1，向原遺跡，早川天神森遺跡
石川県立埋蔵文化財センター	金沢市犀川鉄橋遺跡第1・2次発掘調査報告書，押水町宿向山遺跡第1次発掘調査概報，鹿島町徳前C遺跡(Ⅳ)，金沢市戸水C遺跡
(財)滋賀県文化財保護協会	一般国道8号線歩道敷設工事に伴う大郡遺跡発掘調査報告書，大伴遺跡発掘調査報告，ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ－3，同Ⅸ－1，滋賀県文化財目録 昭和58年度追録，湖北町簡易水道西部地区

	布設事業に伴う埋蔵文化財調査概要Ⅰ，高月町上水道事業に伴う埋蔵文化財調査概要Ⅱ，湖岸堤管理用道路（川尻・菖蒲工区）工事予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書，ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅸ－1
高槻市立埋蔵文化財調査センター	嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・7
(財)大阪文化財センター	亀井遺跡，大堀城跡発掘調査報告書
和泉丘陵内遺跡調査会	和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅱ
奈良国立文化財研究所	昭和49年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報，同昭和51年度～昭和53年度，同昭和57年度，平城京東堀河左京九条三坊の発掘調査，平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告，平城京朱雀大路発掘調査報告，飛鳥・藤原宮発掘調査概報13，平城宮発掘調査出土木簡概報(十六)，藤原宮出土木簡(六)，市道九条線関係遺跡発掘調査概報(Ⅰ)，埋蔵文化財ニュース40，同41，遺跡整備資料Ⅱ 古墳・墳墓
奈良県立橿原考古学研究所	大和を掘る
(財)元興寺文化財研究所	中・近世瓦の調査研究―元興寺編―
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)，境ケ谷遺跡群，西ケ迫古墳群，薄古第1号・第2号古墳発掘調査報告，烏ケ尾第1号古墳発掘調査報告，槇ケ峠第2号古墳発掘調査報告，古江西第1号貝塚発掘調査報告，溝下遺跡発掘調査報告書，天高第1号古墳，奥田大池遺跡，赤城跡発掘調査概報，滑谷遺跡，山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)，沖田古墓，谷上第1号古墳緊急調査概報，塚ケ迫第1号古墳発掘調査報告書，三玉大塚古墳
山口県埋蔵文化財センター	朝田墳墓群Ⅵ，玉祖遺跡・西小路遺跡，須佐唐津窯，萩ケ台遺跡Ⅱ，見島ジーコンボ古墳群，生産遺跡分布調査報告
(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	白萩遺跡・潤崎遺跡・瀬板遺跡・西ソノ遺跡・一升水遺跡・長行遺跡，下吉田古墳群・菅生遺跡
文化庁記念物課	遺跡保存方法の検討
札幌市教育委員会	札幌市文化財調査報告書 XXVI
平賀町教育委員会	五輪堂遺跡
胆沢町教育委員会	角塚古墳調査報告，上萩森遺跡，小十文字遺跡
米沢市教育委員会	米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書 第Ⅱ集，戸塚山第137号墳発掘調査報告書
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財保護行政年報
千葉県教育委員会	千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報―昭和56年度―，下総町名木廃寺跡確認調査報告，千葉県中近世城跡研究調査報告書 第3集
神奈川県教育委員会	神奈川県埋蔵文化財調査報告25
川崎市教育委員会	新作小高台遺跡発掘調査報告書，長尾鯉坂遺跡発掘調査報告書

横浜市教育委員会	昭和57年度文化財年報
長野市教育委員会	浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構
名古屋市教育委員会	ＮＮ-268号古窯跡発掘調査報告書
滋賀県教育委員会	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅷ－３，高田館跡遺跡発掘調査概要，新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要，大伴遺跡発掘調査報告
泉佐野市教育委員会	三軒屋遺跡，泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要・Ⅲ
和泉市教育委員会	府中遺跡群発掘調査概要Ⅲ
岸和田市教育委員会	土生遺跡他発掘調査概要，昭和57年度発掘調査概要
羽曳野市教育委員会	古市遺跡群Ⅳ，イラストでつづる羽曳野の歴史
八尾市教育委員会	八尾市内遺跡昭和57年度発掘調査報告書，昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査
柏原市教育委員会	柏原市埋蔵文化財調査概報 1982年度，大平寺古墳群
東大阪市教育委員会	千手寺・日下遺跡発掘調査概報
神戸市教育委員会	松野遺跡発掘調査概報
三田市教育委員会	古三田青磁
川西市教育委員会	川西市加茂遺跡
広島市教育委員会	草津城跡発掘調査報告，弘住遺跡発掘調査報告
広島県教育委員会	緑岩古墳，広島県文化財調査報告 第14集，亀山遺跡―第２次発掘調査概報―，下本谷遺跡第４次発掘調査概報，酒屋高塚古墳，備後国府跡―推定地にかかる第１次調査概報―，中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4)
豊北町教育委員会	土井ケ浜遺跡第７次発掘調査概報，三浦山遺跡
下関市教育委員会	伊倉遺跡，綾羅木川下流域の条里遺構
福岡県教育委員会	三雲遺跡Ⅳ，九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―２―，塚堂遺跡Ⅰ，石崎曲り田遺跡Ⅰ，八木山バイパス関係埋蔵文化財調査報告，如法寺，半田古墳群Ⅰ，天仲寺古墳・広運寺古墳
東町教育委員会	山門野遺跡
鹿児島県教育委員会	成川遺跡，大隅地区埋蔵文化財分布調査概報，鹿児島（鶴丸）城本丸跡，苦辛城跡，成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡
東京都目黒区守屋教育会館郷土資料室	目黒不動遺跡
青梅市郷土博物館	霞台遺跡群
出光美術館	出光美術館 館報第43号
板橋区立郷土資料館	茂呂山東方遺跡，志村坂上遺跡調査報告，板橋区立郷土資料館紀要第２号
茅ケ崎市文化資料館	茅ケ崎市文化財資料集 第９集

魚津市立歴史民俗資料館	富山県魚津市遺跡分布調査概要Ⅰ，富山県魚津市早月上野遺跡
敦賀市立歴史民俗資料館	特別展 敦賀鷹画師橋本長兵衛展
尖石考古館	横井・阿弥陀堂遺跡
名古屋市博物館	名古屋市博物館年報 No. 6
大阪市立博物館	大阪市立博物館報 No. 22
堺市博物館	館報Ⅱ
(財)辰馬考古資料館	昭和57年度秋季展―兵庫の古代寺院跡Ⅰ―，辰馬考古資料館考古学研究紀要1
鳥取県立博物館	郷土と博物館 第28巻 第2号
福山市立福山城博物館	福山市立福山城博物館友の会だより No. 13
徳島県博物館	徳島県博物館紀要 第14集
東北大学文学部考古学研究室	モンサル―考古学資料集4―
法政大学文学部考古学研究室	本屋敷古墳群発掘調査概報2
名古屋大学文学部考古学研究室	愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)，正家1号窯発掘調査報告書
大阪大学南原古墳調査団	長法寺南原古墳
大谷女子大学資料館	四天王寺，幽蘭堂年譜(四)，札馬
奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会	奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅰ
考古学フォーラム	考古学の広場 第1号
大阪郵政考古学会	郵政考古紀要 'APXAI' AⅧ
長岡京跡発掘調査研究所	長岡京 第26号
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和57年度
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会	京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ
(財)京都府文化財保護基金	京都の美術工芸 与謝・丹後編
綾部市	綾部市史 上巻，同下巻，同史料編
舞鶴市	舞鶴市史 通史編(中)，同通史編(下)，同各説編，同史料編
宇治市	宇治市史1～6
久美浜町	久美浜町誌
加悦町	加悦町誌
長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書 第11冊
宇治市教育委員会	飛鳥へ運ばれた瓦―宇治隼上り瓦窯跡の発掘―，宇治市遺跡地図
城陽市教育委員会	城陽市埋蔵文化財調査報告書 第12集，城陽の歴史をたずねて

亀岡市教育委員会	史跡丹波国分寺跡第1次発掘調査報告書
綾部市教育委員会	綾部市文化財調査報告 第10集
宮津市教育委員会	日置遺跡発掘調査概要，中野遺跡第4次発掘調査概要
岩滝町教育委員会	丹後弓木城
丹後町教育委員会	丹後竹野遺跡
久美浜町教育委員会	久美浜町の古い遺跡
京都府立総合資料館	資料館紀要 第2号，同第4号～第6号，同第8号～第11号
京都市歴史資料館	昭和57年度京都市歴史資料館年報 No. 1
京都市考古資料館	京都市考古資料館年報 昭和56・57年度
京都府立丹後郷土資料館	永島家住宅の民具
同志社大学校地学術調査委員会	公家屋敷二条家北辺地点の調査
(財)古代學協會	古代文化 第293号～第294号
(株)岡墨光堂	国宝伝源頼朝像・国宝伝平重盛像・国宝伝藤原光能像修理報告，墨光堂90年のあゆみ
城南郷土史研究会	やましろ 第16号
高　井　悌三郎	摂津旧清遺跡
相　田　則　美	シンポジウム愛媛の前方後円墳
清　水　真　一	徳楽方墳，上中ノ原・井後草里遺跡発掘調査報告書，長瀬高浜遺跡出土の銅釧とその背景
安　藤　鴻　基	木下別所廃寺跡第二次発掘調査概報，房総の埴輪について
玉　城　一　枝	西村遺跡Ⅲ
三　浦　純　夫	中島町小牧・外遺跡，辰口町下開発茶臼山古墳群，金沢市犀川鉄橋遺跡第1・2次発掘調査報告書
河　上　邦　彦	特別展中国の都城遺跡，飛鳥京跡一第71次～73次および嶋宮推定地第16次調査一，向坊古墳発掘調査報告
中　田　易　直	糸割符仲間の成立について
吉　岡　康　暢	東大寺領横江庄遺跡
辰　巳　和　弘	引佐町の古墳文化Ⅲ
堀　田　啓　一	大和を掘る

—編集後記—

第９号をお届けします。

本誌掲載の青野西遺跡は，弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が多数見つかり，全国的に注目を浴びるようになりました。また丹後木橋城跡の調査は，昭和54年度事業として京都府教育委員会が実施したものですが，諸搬の事情で報告ができずにいたものを，関係各位に了承を得て，本誌に掲載するに至りました。よろしく，御味読下さい。

先般，当調査研究センターで「第２回小さな展覧会」を開催し，昨年度を上回る方々が御見学されました。来年度は，向日市の新庁舎にて開催する予定ですので，御見学を賜われば幸いです。

（編集担当　土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第９号

昭和58年９月30日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル中御霊町424番地
℡ (075)256-0416

印刷　中西印刷株式会社
代表者　中西　亨
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
℡ (075)441-3155（代）